

# 大学入学共通テストの導入に向けた試行調査 (プレテスト) (平成30年2月実施分) の 結果報告

平成30年6月1日

## 目次

I	外国語科「英語」の調査の概要	2
II	外国語科「英語」の試行調査(プレテスト)の趣旨と分析・検討方針	3
III	外国語科「英語」の分析結果の報告	
	ー各科目等の問題構成、設問数、内容等の在り方に関する分析・検討ー	5
1	外国語科「英語」全体の結果の概要	5
2	英語(筆記[リーディング])の結果	19
3	英語(リスニング)の結果	27
IV	受検上の配慮(点字問題)の結果報告	
1	調査の概要	36
2	分析結果の報告	37

# I 外国語科「英語」の調査の概要

## 1. 実施期間

平成30年2月13日（火）～3月3日（土）

上記の期間内に、試行調査に参加する高等学校及び中等教育学校（以下「協力校」という。）が任意の日時で実施（実施会場は各協力校）。

なお、試行調査には、全高等学校・中等教育学校の約3%（158校）が参加。

## 2. 受検者数及び協力校数等

### ① 実施内容別受検者数

教科科目	実施内容	試験時間	受検者数
外国語科 英 語	筆 記 [リーディング]	80分	6,281人
	リスニング (バージョンA)	30分	3,132人
	リスニング (バージョンB)	30分	3,154人
全 体			6,308人

※ リスニングは、バージョンAとバージョンBの2種類の問題で試行調査を実施。バージョンAは、読み上げ回数が全て2回読みの問題であり、バージョンBは、読み上げ回数が1回読みと2回読みの問題が混在するもの。

※ 原則として、「筆記 [リーディング]」を受けた受検者は、「リスニング (バージョンA)」または「リスニング (バージョンB)」も受検することとしている。

※ 全体の受検者数は、いずれかの内容を受検した者の数。

### ② 都道府県別協力校数及び受検者数

都道府県	協力校数	受検者数	都道府県	協力校数	受検者数	都道府県	協力校数	受検者数	都道府県	協力校数	受検者数
北海道	5校	195人	東京都	17校	598人	滋賀県	2校	79人	香川県	2校	77人
青森県	2校	117人	神奈川県	7校	263人	京都府	7校	260人	愛媛県	3校	111人
岩手県	1校	31人	新潟県	3校	159人	大阪府	9校	324人	高知県	1校	74人
宮城県	2校	119人	富山県	1校	39人	兵庫県	5校	181人	福岡県	7校	265人
秋田県	1校	77人	石川県	2校	115人	奈良県	2校	76人	佐賀県	1校	39人
山形県	2校	118人	福井県	1校	68人	和歌山県	1校	38人	長崎県	1校	41人
福島県	2校	86人	山梨県	1校	81人	鳥取県	3校	101人	熊本県	3校	108人
茨城県	3校	126人	長野県	1校	27人	島根県	1校	41人	大分県	1校	77人
栃木県	2校	113人	岐阜県	2校	84人	岡山県	5校	166人	宮崎県	2校	80人
群馬県	1校	41人	静岡県	8校	317人	広島県	6校	188人	鹿児島県	3校	127人
埼玉県	6校	221人	愛知県	8校	309人	山口県	2校	84人	沖縄県	2校	68人
千葉県	6校	197人	三重県	4校	162人	徳島県	1校	40人	計	158校	6,308人

### ③ 国公私別協力校数及び受検者数

	協力校数	受検者数
公立	94校	4,119人
私立	60校	2,035人
国立	4校	154人
計	158校	6,308人

### ④ センター試験志願者数規模別受検者数

実施内容	H29センター試験志願者数 1～99人の学校		H29センター試験志願者数 100人以上の学校	
	受検者数	受検者割合	受検者数	受検者割合
筆記 [リーディング]	1,236人	19.7%	5,045人	80.3%
リスニング (バージョンA)	608人	19.4%	2,524人	80.6%
リスニング (バージョンB)	630人	20.0%	2,524人	80.0%
全体	1,241人	19.7%	5,067人	80.3%

### ⑤ 学年別受検者の割合

高校2年 (中等5年)	高校3年 (中等6年)	その他	無回答ほか
97.9%	1.3%	0.4%	0.4%

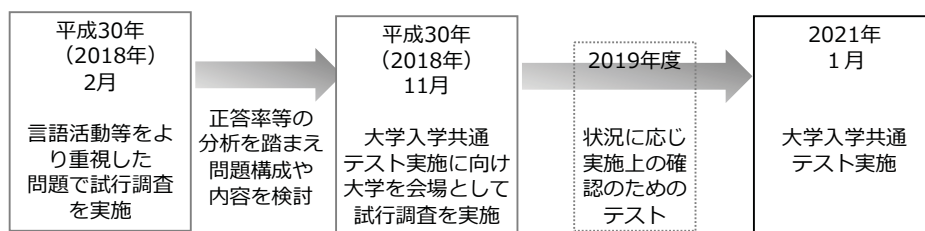
※ 筆記 [リーディング] の受検者に対して実施したアンケートの回答数により割合を算出。  
 ※ 筆記 [リーディング] の受検者は6,281人。うち、生徒用アンケート有効回答数は6,219。

## II 外国語科「英語」の試行調査(プレテスト)の趣旨と分析・検討方針

### 1 試行調査(プレテスト)の趣旨、作問体制等

- 外国語科「英語」については、民間の資格・検定試験の活用と併せて、大学入試センターが行う試験も実施するという2023年度までの方針が、平成29年7月に文部科学省の「大学入学共通テスト実施方針」において示された。これを受けて、大学入試センターが作問・実施する外国語科「英語」の試験の在り方を検証するための試行調査を実施することとしたもの。このため、平成29年11月に実施した他教科・科目とは別日程の平成30年2月の実施となったもの。
- 新しいテストの問題構成や内容等を決定していくに当たっては、あらかじめ、英語教育の改革の方向性を踏まえつつ、実際のコミュニケーションの場面等における言語活動等をより重視した新たなねらいの問題を出題した場合の正答率や解答の傾向等を分析しておく必要がある。こうした分析を行うためには、地域バランス等にも配慮しながら分析に必要な規模のデータを集める必要があるため、今回、全国の高校等に御協力いただき実施したもの。
- 作問は、大学入試センターの新テスト実施企画委員会に設置された問題調査研究部会の科目別ワーキンググループで担当。高校の各教科の学習成果として身に付いた大学教育の基礎力を適切に捉える作問となるよう、大学入試センターに各教科の試験問題企画官を常勤で置くとともに、科目別ワーキンググループには高校教員も委員として参加し、高大双方の知見を反映させながら作問していくための体制を整備。  
 通常、大学入試センター試験で使われる問題の作成には2年程度を要するが、今回は、平成29年夏に委員を選任、平成30年1月まで5ヶ月程度で集中的に議論し作成。問題点検の作業についても、今回は別部会を設置せず、科目別ワーキンググループにおいて併せて実施。

- 今回の外国語科「英語」の試行調査では、平成29年11月の試行調査と同様、高等学校学習指導要領において育成を目指す資質・能力に準拠し、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視。
- 試行調査においては、英語の資格・検定試験活用に関する方針も踏まえながら、「読むこと」「聞くこと」の能力をバランスよく把握するため、筆記〔リーディング〕（マーク式）とリスニング（マーク式）を実施。  
 いずれにおいても、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、A1からB1までの問題を組み合わせて出題するとともに、実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視。
- 筆記〔リーディング〕については、テキストを読み事実や意見等を整理する力、テキストの構成を理解する力、テキストの内容を理解して要約する力等を問うことをねらいとし、問題の構成や内容を検証。なお、英語の資格・検定試験の活用を通じて「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な評価がなされる方針であることを踏まえ、発音、アクセント、語句整序などの問題は出題していない。
- リスニングについては、複数の情報を比較して判断する力や、議論を聞いて要点を把握する力等を問うことをねらいとし、問題の構成や内容を検証。音声については、アメリカ英語以外の読み上げ（イギリス人や英語を母語としない人による読み上げ）も実施。また、資格・検定試験における英語のリスニング試験における一般的な在り方を踏まえ、読み上げ回数についても検証（受検者を二つのグループに分け、全て2回読みのもので実施するグループと、1回読みと2回読みが混在するもので実施するグループを比較）。
- なお、昨年11月の試行調査と同様、目標平均正答率は設定していない。
- 試行調査で出題される問題は、あくまでも検証のためのものであり、今回の問題構成や内容が必ずしもそのまま2021年1月からの大学入学共通テストに受け継がれるものではないという点に留意。実際の大学入学共通テストの問題構成や内容等がどのようなものになるかは、今回の試行調査の結果等を踏まえ今後更に検討されるものである。



## 2 分析・検討方針

- 大学入試センターに設置された「新テスト実施企画委員会」において、試行調査実施前にあらかじめ分析・検討方針を専門的な見地からご審議いただき、この方針（「Ⅲ 外国語科「英語」の分析結果の報告」以降の枠囲み）に従って実施過程や結果に関する分析・検討を行った。
- 科目別ワーキンググループにおいては、平成30年度試行調査の実施に向けて、今回の試行調査の解答の傾向等の分析を踏まえ、大学入試センター試験に関する既存のデータも活用しながら、問題の構成や内容等を検討中。また、今回のような言語活動を重視した問題をどのような場面で、どの程度のテキスト分量や種類のバランスで出題するのか等を含め検討中。

### Ⅲ 外国語科「英語」の分析結果の報告

#### —各科目等の問題構成、設問数、内容等の在り方に関する分析・検討—

##### 【分析・検討方針】

- 大学入試センターにおいて分析チームを構成し、次のような項目について試行調査の結果に基づくデータ解析を行い、科目別WGに提供する。
  - ① 設問ごとの正答率や誤答の選択状況
  - ② 設問ごとの五分位図
  - ③ 設問ごとの識別力（項目得点と総点とのピアソン相関）
  - ④ 正答数の分布
  - ⑤ 質問紙調査（試験時間、問題量、難易度、問題文の指示の仕方や図・資料等の提示の仕方、進路等に関する質問）を参考にした分析

※ 外国語科「英語」については、上記に加え、筆記【リーディング】については、発音、アクセント、語句整序に関する分析、リスニングについては、聞き取る音声の回数の分析を実施。

#### 1 外国語科「英語」全体の結果の概要

##### ① 設問ごとの正答率や誤答の選択状況

（正答率の状況）

- 各設問の正答率は、別冊「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）（平成30年2月実施分） 設問別のねらい及び正答率（確定値）」のとおり。なお、正答率が5割を上回る設問数は次のとおり。

科目等名	総設問数	正答率が5割を上回る設問数	割合
筆記【リーディング】	34	23	67.6%
リスニング（バージョンA）	20	8	40.0%
リスニング（バージョンB）	30	12	40.0%

注）リスニングは、バージョンAとバージョンBの2種類の問題で試行調査を実施。バージョンAは、読み上げ回数が全て2回読みの問題であり、バージョンBは、読み上げ回数が1回読みと2回読みの問題が混在するもの。

分析に当たっては、次の点も踏まえることが必要。

- ・ 受検者のほとんどが高校2年生であること。
- ・ 平成29年度センター試験の結果に関するデータを用いて、今回の試行調査に協力いただいた高校の生徒の平均点を算出し全体の平均点と比較したところ、筆記【リーディング】、リスニングともに、今回の試行調査に協力いただいた高校の生徒の方が高い傾向にあること。
- 今回の試行調査においては、素点以外の成績提供の在り方についても検証することを踏まえ、目標平均正答率は設定しなかったが、素点表示が社会的に浸透している現状を踏まえ、仮に得点の分布情報を利用した段階別表示を行うとしても当面は素点と併用することになると見込まれる。
- このことを踏まえ、平成30年度試行調査においては、平成29年11月に実施した試行調査と同様に、今回の試行調査における正答率等の分析を踏まえつつ平均得点率（又は平均正答率）を設定する方向性。具体的には、大学入試センター試験の作問を踏まえ、新しいタイプの問題の出題が求められることから、科目ごとの総合的な平均得点率（又は平均正答率）5割程度を目指すことを念頭に、正答率が低かった「選択肢が2回以上使用可能な問題」の工夫・改善を図っていく予定。



(誤答の選択状況)

- 各科目等において、特定の誤答選択肢を選択した者の数が正答を選択した者の数を上回った設問数は次のとおり。各設問の分析はこの点にも留意して行った。

科目等名	総設問数	特定の誤答選択肢を選択した者の数が正答を選択した者の数を上回る設問数	割合
筆記 [リーディング]	34	5	14.7%
リスニング (バージョンA)	20	6	30.0%
リスニング (バージョンB)	30	12	40.0%

(新しい出題形式の状況)

- 「当てはまる選択肢を全て選択する問題」と、「選択肢が2回以上使用可能な問題」における正答率と、当該科目等の正答数による五分位図※のLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下であった問題は次のとおり。

「当てはまる選択肢を全て選択する問題」

科目等名	問題番号	正答率	Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下
筆記 [リーディング]	第2問A問4 (解答番号9)	14.0%	
	第5問B問2 (解答番号31,32)	6.0%	
リスニング (バージョンA)	第6問B問19 (解答番号19)	45.5%	
リスニング (バージョンB)	第6問B問29 (解答番号29)	40.8%	

「選択肢が2回以上使用可能な問題」

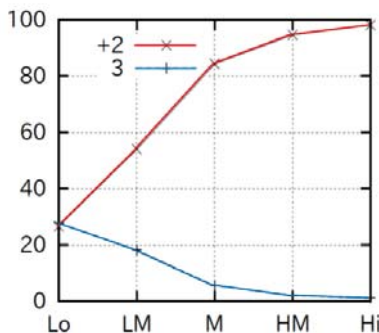
科目等名	問題番号	正答率	Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下
リスニング (バージョンA)	第5問問14 (解答番号14A-C)	12.0%	
リスニング (バージョンB)	第4問A問21 (解答番号21)	3.1%	○
	第5問問24 (解答番号24A-C)	7.8%	○

※ 以下「五分位図とは」参照

※ 五分位図とは

当該科目等の正答数により、受検者を五群に（ほぼ）等分割し、正答数の少ない順に、Lo群、LM群、M群、HM群、Hi群と名付け、各群ごとに選択肢の選択率を示したもの。

なお、大問の五分位図については、正答率のみを示しているが、小問の五分位図については、右図の例のとおり、誤答の選択肢の選択率が10%以上のものがある場合には、その率も表示している。



下位～中位群を識別  
赤：正答  
青：誤答

② 設問ごとの五分位図

○ 大問の五分位図を見ると、筆記 [リーディング]、リスニングともに全ての大問で、Hi群とLo群の正答率の差が20ポイントを超えていた。

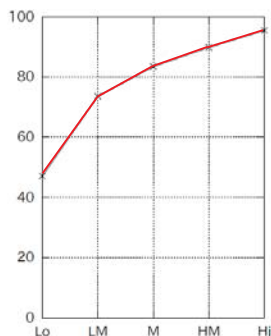
○ また、Hi群の正答率が60%程度を超えている大問は、筆記 [リーディング] については全て、リスニングについては、バージョンAで4題、バージョンBで3題となっていた。

今回の試行調査においては、「Ⅱ 1 試行調査（プレテスト）の趣旨、作問体制等」において述べたとおり、複数の情報を比較して判断する力や、議論や講義を聞いて要点を把握する力等を問うことをねらいとする問題を重視して出題した。こうしたねらいの結果、特に、リスニングについては、問題中の情報量や聞き取る英語の量が増え、問題に目を通す時間や解答を考える時間がより必要となるなど、受検者にとって難易度が高くなった可能性などが考えられる。

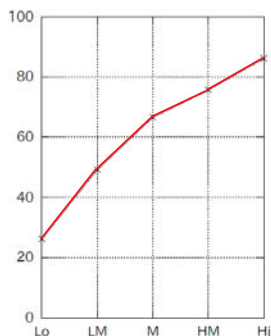
<大問の五分位図>

【筆記 [リーディング]】

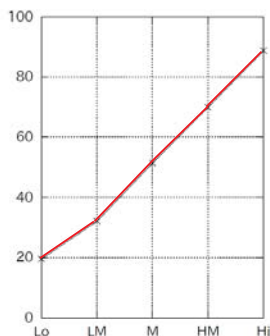
第1問



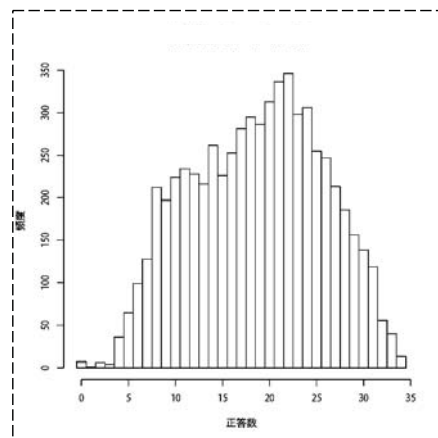
第2問



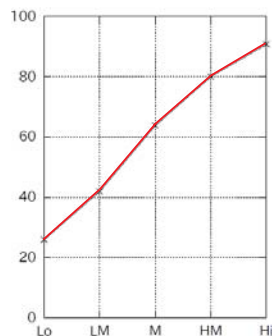
第3問



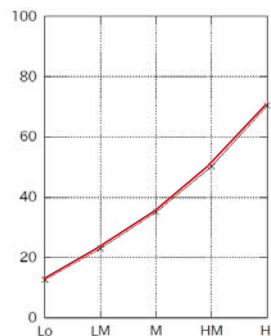
<正答数の分布図>



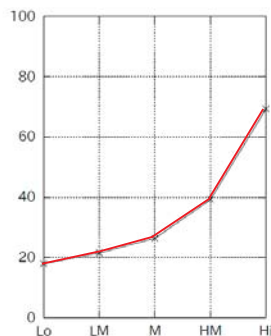
第4問



第5問



第6問

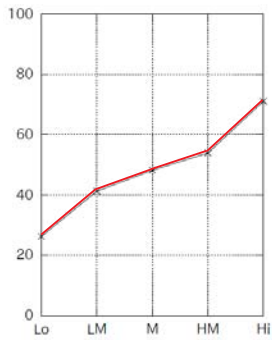


科目等全体の正答数の多い受検者の方が各大問の正答率が高い傾向にある。第2問～第6問については、正答率の分布と併せて見ても、多様な学力層を識別していることがうかがえる。

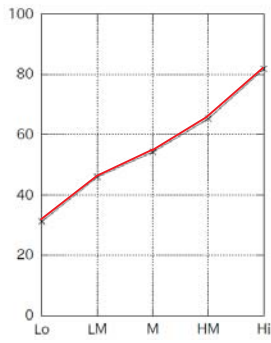
第1問～第4問は、Hi群の正答率は80%を超えている。

【リスニング（バージョンA）】

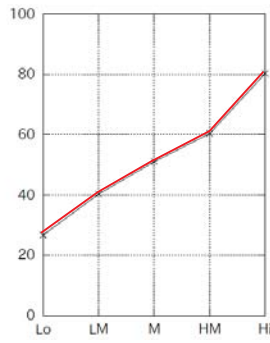
第1問



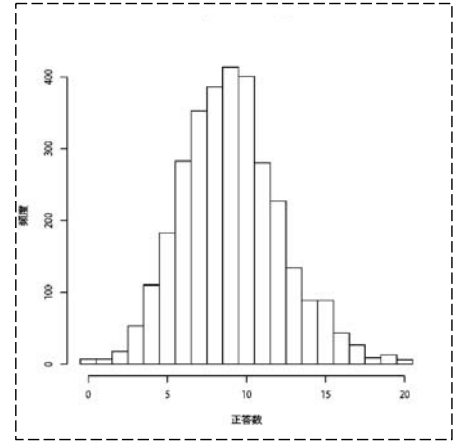
第2問



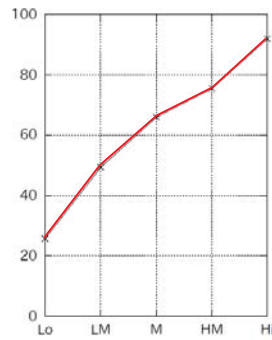
第3問



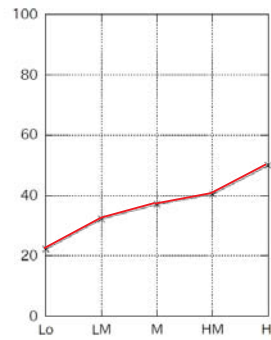
〈正答数の分布図〉



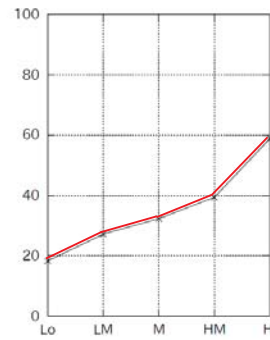
第4問



第5問



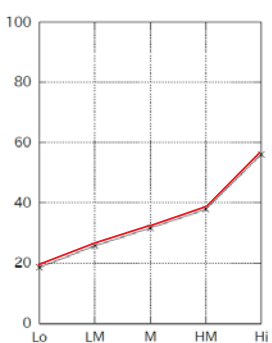
第6問



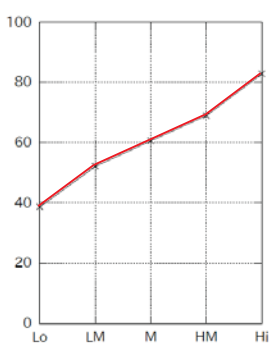
科目等全体の正答数の多い受検者の方が各大問の正答率が高い傾向にある。  
第5問、第6問は、Hi群の正答率は60%を超えていない。

【リスニング（バージョンB）】

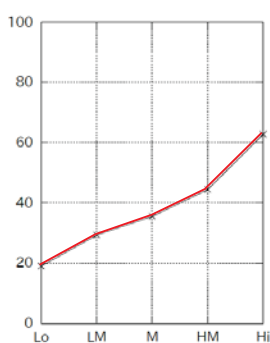
第1問



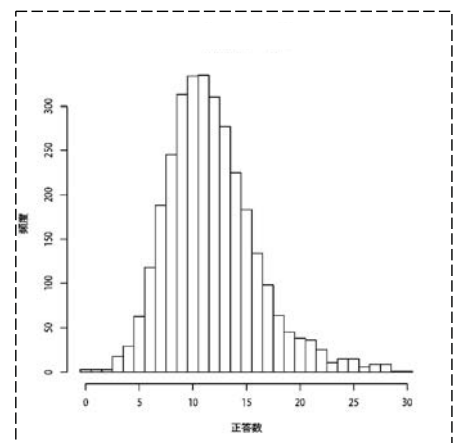
第2問



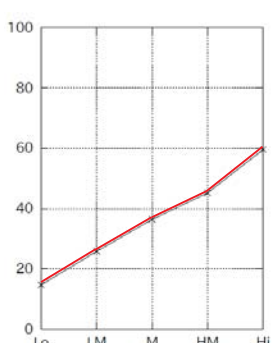
第3問



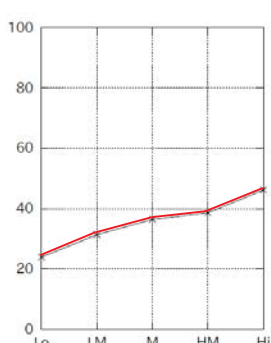
〈正答数の分布図〉



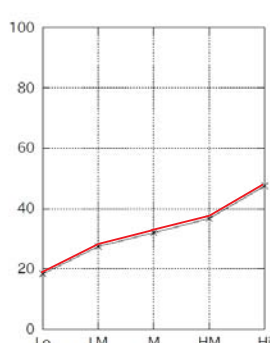
第4問



第5問



第6問



科目等全体の正答数の多い受検者の方が各大問の正答率が高い傾向にある。  
第2問を除き、Hi群の正答率は60%を超えていないが、60%程度となっている。



③ 設問ごとの識別力（項目得点と総点とのピアソン相関）

- 設問ごとの正誤と正答数とのピアソン相関※を基に、設問ごとに科目等全体との相関を分析した。科目等ごとの、ピアソン相関が0.1を下回り、他の設問との相関が低い問題数は、以下のとおり。各科目等では、これらの設問を中心に更に分析を行っている。

※ 科目等の正答率から当該設問を除いたものと当該設問の正答率との相関。0.1を下回っていると、当該テストの項目としては適切ではないと考えられる。

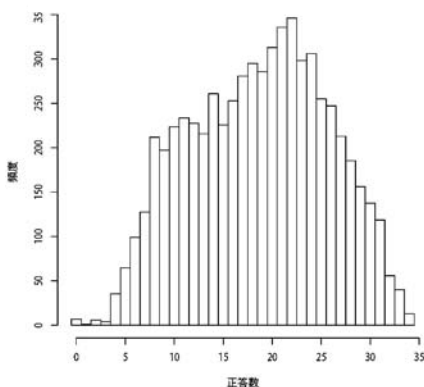
科目等名	総設問数	相関が低い設問数	割合
筆記 [リーディング]	34	0	0.0%
リスニング (バージョンA)	20	2	10.0%
リスニング (バージョンB)	30	2	6.7%

④ 正答数の分布

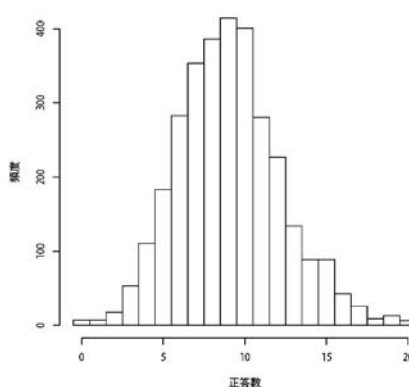
- 正答数は、筆記 [リーディング] で中央からやや多い方に分布しており、リスニング (バージョンA) は、左右対称に近く、リスニング (バージョンB) は、中央からやや少ない方に分布している。
- リスニング (バージョンA) においては、問題数が少ないことから、同じ正答数に400以上集まる傾向が見られる。
- 各科目等の設問正答率幹葉図を見ると、リスニング (バージョンB) で正答率が低い問題がやや多い傾向が見られる。
- 平成30年度試行調査に向けて、特に、リスニングにおいては、より多様な学力層を識別できるようにしていく。

<正答数の分布図>

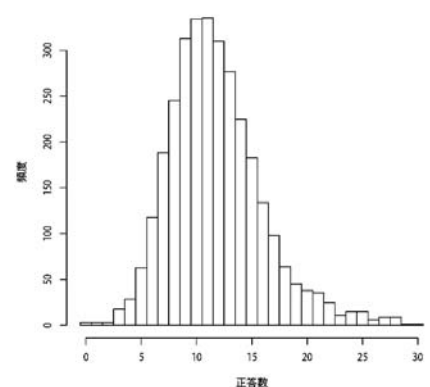
【筆記 [リーディング]】



【リスニング (バージョンA)】



【リスニング (バージョンB)】



<設問正答率幹葉図>

【筆記 [リーディング]】

平均正解率区間 (設問数)	設問番号
95% ≥	(0)
90% ~ 95%	(1) 3
85% ~ 90%	(1) 2
80% ~ 85%	(1) 1
75% ~ 80%	(3) 7,11,30
70% ~ 75%	(5) 8,12,13,18,23
65% ~ 70%	(3) 5,21,33
60% ~ 65%	(2) 10,25
55% ~ 60%	(5) 4,14,16,(31)[2],[32][3]
50% ~ 55%	(7) 15,20,22,24,28,29,38
45% ~ 50%	(5) (9)[1],17,(31)[4],[32]5,34
40% ~ 45%	(1) (9)[3]
35% ~ 40%	(4) 6,28-29-30,(32)[6],35
30% ~ 35%	(3) 19,26,36
25% ~ 30%	(2) 27,37
20% ~ 25%	(1) 34-35
15% ~ 20%	(1) 32
10% ~ 15%	(2) 9,31
5% ~ 10%	(1) 31-32
< 5%	(0)

【リスニング (バージョンA)】

平均正解率区間 (設問数)	設問番号
95% ≥	(0)
90% ~ 95%	(0)
85% ~ 90%	(2) 5,(19)[1]
80% ~ 85%	(1) (19)[4]
75% ~ 80%	(1) 13
70% ~ 75%	(1) 8
65% ~ 70%	(1) (14A)
60% ~ 65%	(3) 9,12,(14X)
55% ~ 60%	(3) 2,(14B),(14Z)
50% ~ 55%	(3) 1,10,(14C)
45% ~ 50%	(4) 6,7,(14Y),19
40% ~ 45%	(0)
35% ~ 40%	(2) 11,17
30% ~ 35%	(2) 15,18
25% ~ 30%	(2) 3,20
20% ~ 25%	(1) 16
15% ~ 20%	(0)
10% ~ 15%	(2) 4,14
5% ~ 10%	(0)
< 5%	(0)

【リスニング (バージョンB)】

平均正解率区間 (設問数)	設問番号
95% ≥	(0)
90% ~ 95%	(0)
85% ~ 90%	(2) 7,(29)[1]
80% ~ 85%	(2) (20A),(29)[4]
75% ~ 80%	(2) 12,23
70% ~ 75%	(1) 14
65% ~ 70%	(1) (20D)
60% ~ 65%	(2) (20B),(20C)
55% ~ 60%	(3) 2,13,(24A)
50% ~ 55%	(9) 1,11,15,17,20,22,(24B),(24X),(24Z)
45% ~ 50%	(2) 10,(24C)
40% ~ 45%	(3) 16,(21A),29
35% ~ 40%	(1) (24Y)
30% ~ 35%	(5) 19,(21C),25,27,28
25% ~ 30%	(2) 3,(21B)
20% ~ 25%	(3) 4,26,30
15% ~ 20%	(2) 5,(21D)
10% ~ 15%	(3) 6,9,18
5% ~ 10%	(2) 8,24
< 5%	(1) 21

⑤ 質問紙調査（試験時間、問題量、難易度、問題文の指示の仕方や図・資料等の提示の仕方、進路等に関する質問）を参考にした分析

○ 生徒のアンケートにおいて、時間が短かったという回答は、筆記 [リーディング] では、49.1%、リスニングのバージョンAでは、82.0%、バージョンBでは、92.2%であった。

また、問題の量が多かったという回答は、筆記 [リーディング] では、71.3%、リスニングのバージョンAでは、47.2%、バージョンBでは、57.7%であった。

問題が難しかったという回答は、筆記 [リーディング] では、60%程度にとどまっているが、リスニングでは、バージョンA、バージョンBともに、80%を超えている。

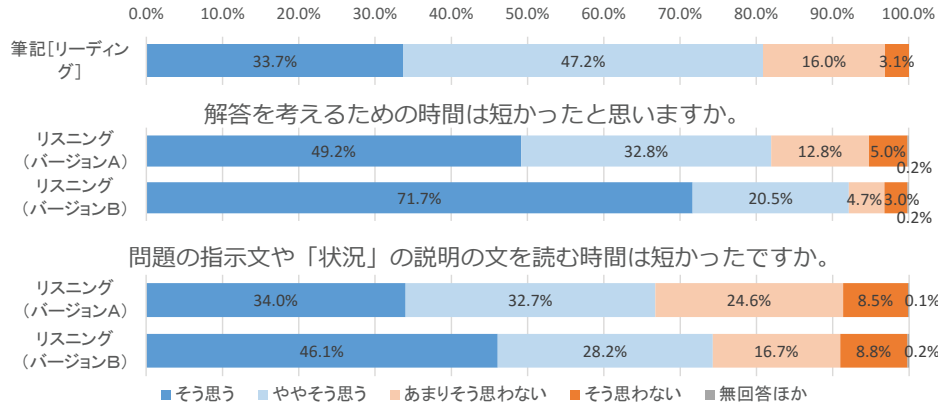
図・表や資料等で見づらいものがあったという回答は、筆記 [リーディング]、リスニングともに10%を下回っている。

○ 出願予定または出願済みの大学等については、国公立大学一般入試専願と国公・私立大学一般入試併願の合計が60%超であり、概ね平成29年11月に実施した試行調査と同様の傾向であるが、当該科目（英語）を入試で受験する予定については90%を超えている。

○ なお、生徒を対象とした各アンケートの有効回答件数等は下表のとおり。

科目等名	有効回答件数	受検者数
筆記 [リーディング]	6,219件	6,281人
リスニング (バージョンA)	3,109件	3,132人
リスニング (バージョンB)	3,131件	3,154人

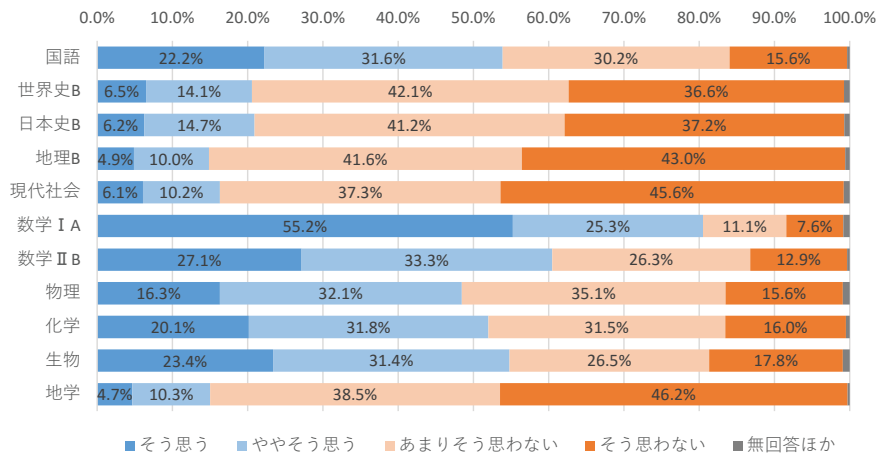
問題を解く上で、試験時間は短かったと思いますか。



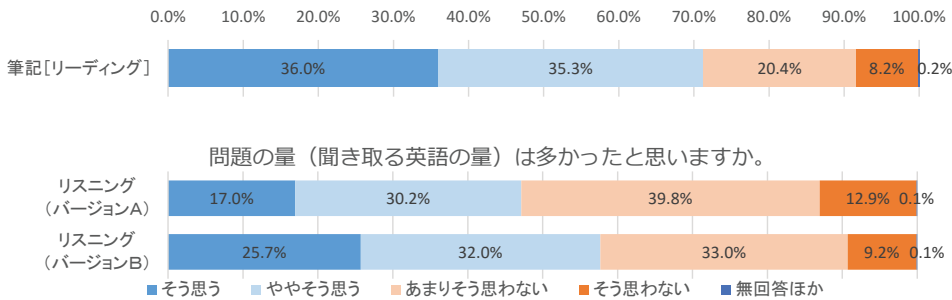
解答を考えるための時間は短かったと思いますか。

問題の指示文や「状況」の説明の文を読む時間は短かったですか。

(参考：平成29年11月実施科目) 問題を解く上で、試験時間は短かったと思いますか。

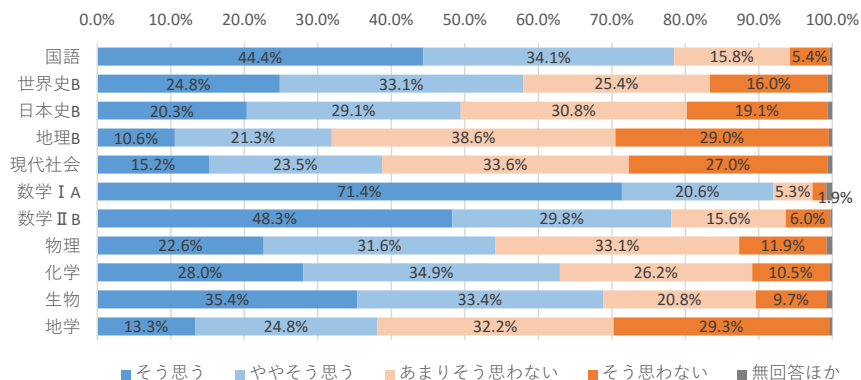


問題の量（文章や資料等）は多かったと思いますか。

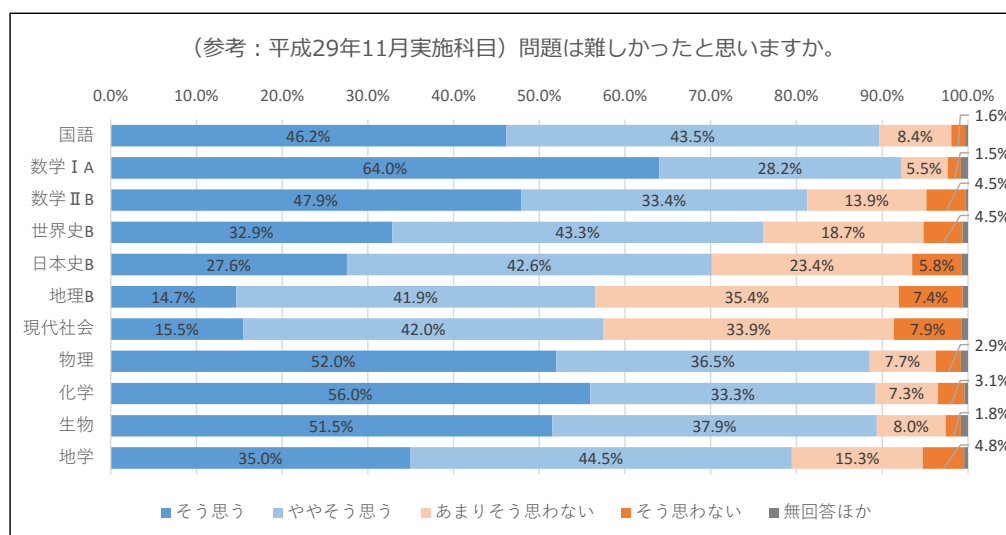
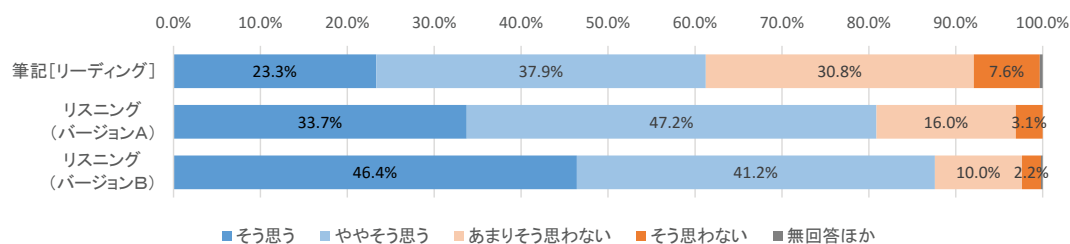


問題の量（聞き取る英語の量）は多かったと思いますか。

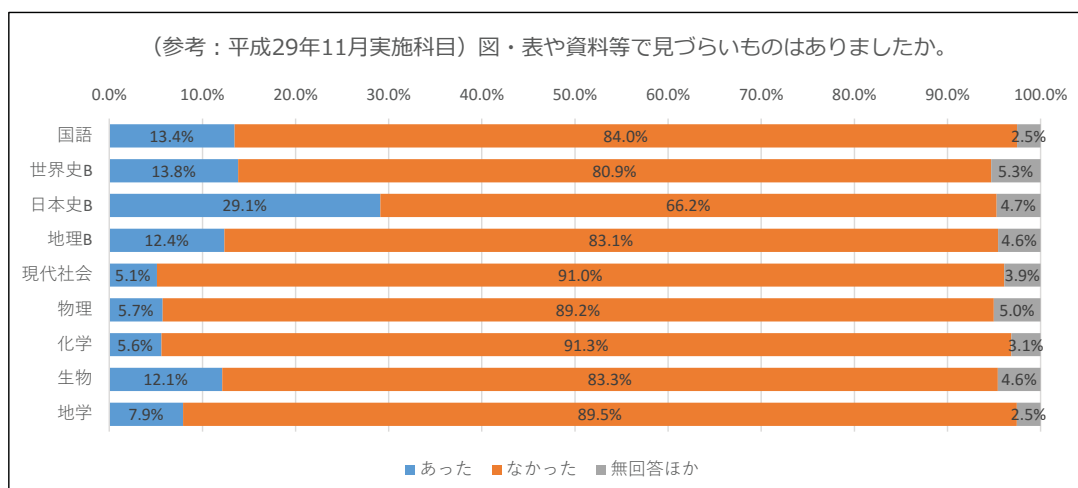
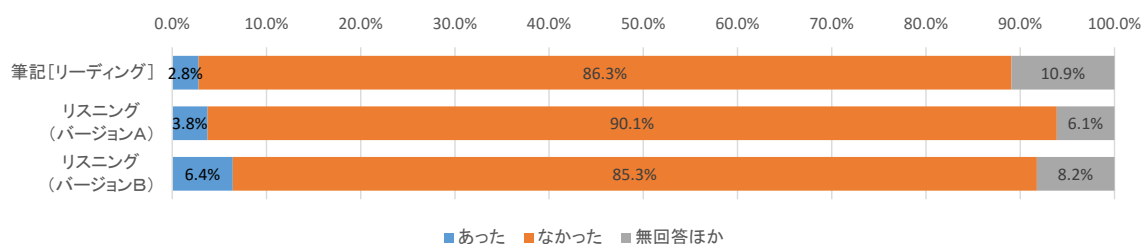
(参考：平成29年11月実施科目) 問題の量（文章や資料等）は多かったと思いますか。



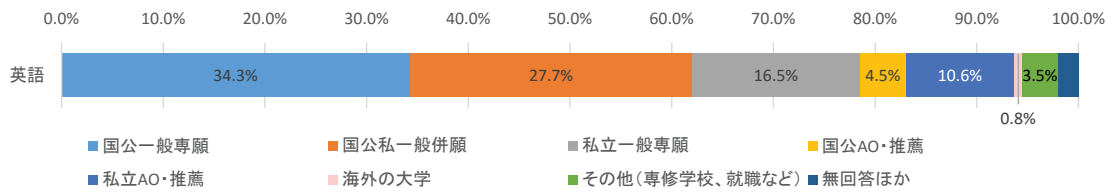
### 問題は難しかったと思いますか。



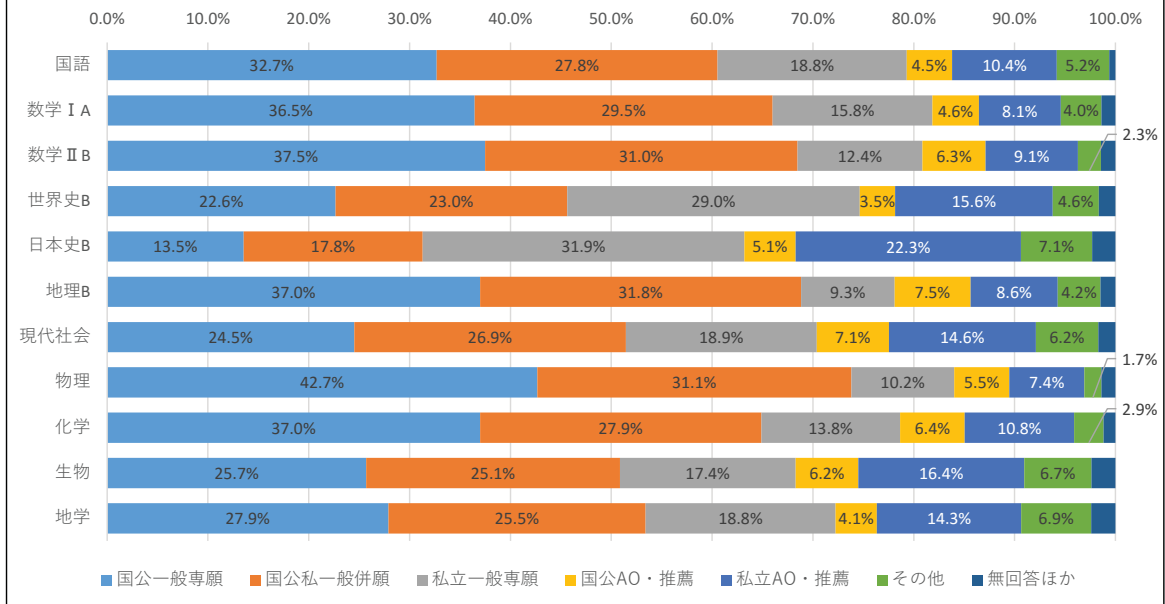
### 図・表や資料等で見づらいものはありましたか。



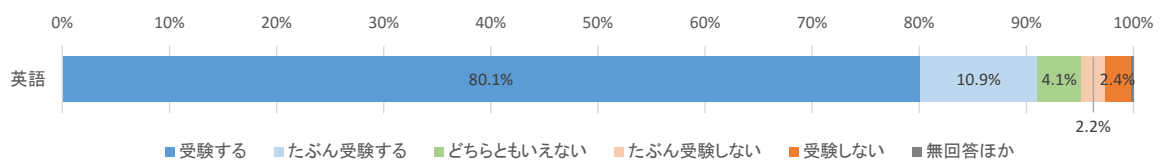
### 出願予定または出願済みの大学の種類・入試区分等



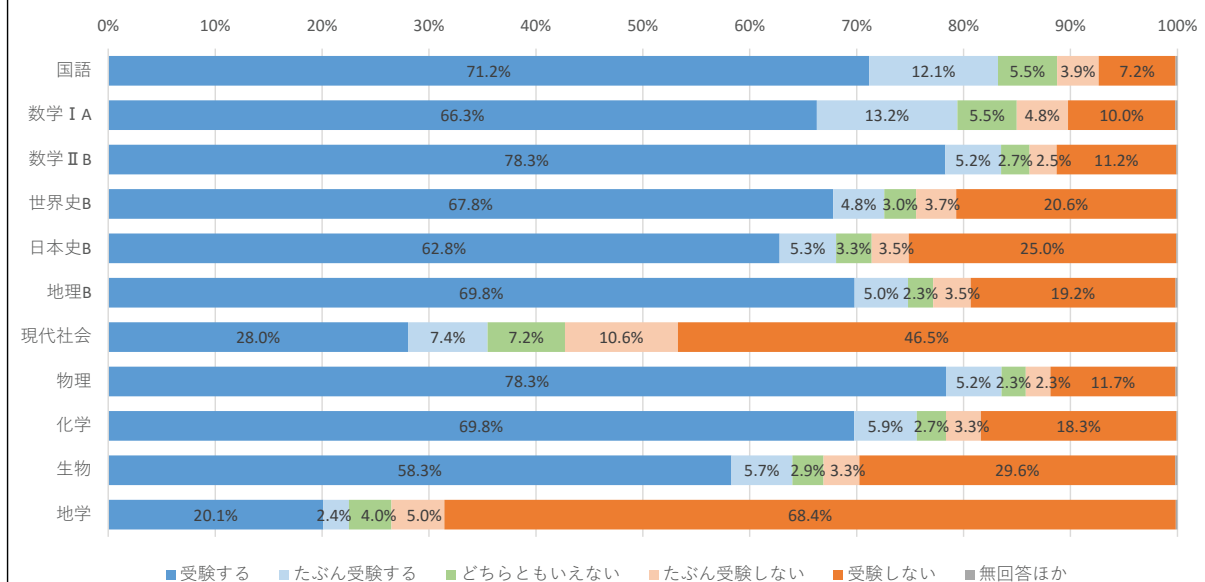
### (参考：平成29年11月実施科目) 出願予定または出願済みの大学の種類・入試区分等



### この科目を入試で受験する予定はありますか。



### この科目を入試で受験する予定はありますか。





## 参考 アンケート項目

### ○生徒用アンケート

※リスニング（バージョンA）と  
リスニング（バージョンB）の項目は共通。

項目	実施内容固有項目の有無
Q 1. あなたの学年等について、当てはまるものを1つずつ選んで、○で囲んでください。	
(1) 学年	「筆記 [リーディング]」のみ
(2) 文系・理系の別	
(3) 出願予定または出願済みの大学の種類・入試区分等（最も重視しているものを1つ）	
(4) 「英語」を入試で受験する予定はありますか。	
Q 2. 「実施内容名」のテスト全体について、最も当てはまるものを1つずつ選んで、○で囲んでください。	
(1) 監督者からの指示内容は分かりやすかったと思いますか。	「筆記 [リーディング]」のみ
(2) 問題冊子の表紙に記載の「マーク例」は分かりやすかったと思いますか。	
(3) 問題冊子の表紙下部の枠組み内に記載した「解答に当たっての留意事項」の指示文は分かりやすかったと思いますか。	
(4) 問題を解く上で、試験時間は短かったと思いますか。	
(5) 問題の量（文章や資料等）は多かったと思いますか。	
(6) 聞き取る英語が流れる前に、問題の指示文や「状況」の説明に目を通す時間がありますが、その時間は短かったと思いますか。	「リスニング」のみ
(7) 問題を解く上で、解答を考えるための時間は短かったと思いますか。	
(8) 聞き取る英語音声のスピードは速かったと思いますか。	
(9) 問題の量（聞き取る英語の量）は多かったと思いますか。	
(10) 問題の難易度は難しかったと思いますか。	
(11) 次の問題について、問題文の指示内容は分かりましたか。問題冊子を見ながら、お答えください。	「筆記 [リーディング]」のみ
(12) 次の問題について、解答方法に関する問題文の指示は分かりやすかったですか。問題冊子を見ながら、お答えください。	「リスニング」のみ
(13) 図・表や資料等で見づらいものはありましたか。問題冊子を見ながら、お答えください。	
Q 3. 聞き取る音声を流す回数について、意見や感想などがありましたら、以下の空欄に書いてください。	「リスニング」のみ
Q 4. 「実施内容名」のテスト全体について、意見や感想などがありましたら、以下の空欄に書いてください。	
Q 5. 英語の民間資格・検定試験のうち、以下に示した試験で、高校入学以降に受験したものがあれば、その受験時期（学年・月）及びスコア（技能別スコア・総合スコア）等をお答えください。	「筆記 [リーディング]」のみ

### ○教員用アンケート

※教員用は「英語」1種類のみ。

項目
Q 1. 実施科目の履修状況について、最も当てはまるものを1つずつ選んで、○で囲んでください。
(1) 履修する学年
Q 2. 「筆記 [リーディング]」のテスト全体について、以下の質問にお答えください。
(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導改善の参考になる問題がありましたか。該当する番号を具体的にお答えください。
(2) 今回の試行調査（プレテスト）では、問題の目的・場面・状況設定を明確にしなが「読むこと」に関する力を測定する出題としていますが、問題の場面設定等が生徒にとって分かりにくいと思われる問題がありましたか。もしあれば、該当する問題の番号とその理由をお答えください。
(3) 今回の「筆記 [リーディング]」のテストでは、「読むこと」に関する力を測定する出題とし、発音・アクセント問題を出題していませんが、このことについてどのように考えますか。
Q 3. 「筆記 [リーディング]」のテスト全体について、意見や感想などがありましたら、以下の空欄に書いてください。
Q 4. 「リスニング」のテスト全体について、以下の質問にお答えください。
(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導改善の参考になる問題がありましたか。該当する番号を具体的にお答えください。
(2) 今回の試行調査（プレテスト）では、問題の目的・場面・状況設定を明確にしなが「聞くこと」に関する力を測定する出題としていますが、問題の場面設定等が生徒にとって分かりにくいと思われる問題がありましたか。もしあれば、該当する問題の番号とその理由をお答えください。
(3) 今回の試行調査（プレテスト）では、聞き取る英語は全て2回流す「バージョンA」と、2回と1回が混在する「バージョンB」の2通りを実施しました。同一時間内で実施する場合、「バージョンA」は「バージョンB」に比べて問題数が少なくなります。リスニング問題の出題方法として、いずれのバージョン（音声を流す回数）がよいと思いますか。また、その理由もお答えください。
Q 5. 「リスニング」のテスト全体について、意見や感想などがありましたら、以下の空欄に書いてください。
Q 6. 平成32年度から導入される「大学入学共通テスト」（以下「共通テスト」という。）について、当てはまるものを選んで、○で囲んでください。
(1) 「共通テスト」について、主にどのような手段によって情報を得ていますか。（複数回答可）
(2) 「共通テスト」に関する以下の事項について、どの程度関心がありますか。

## 【分析・検討方針】

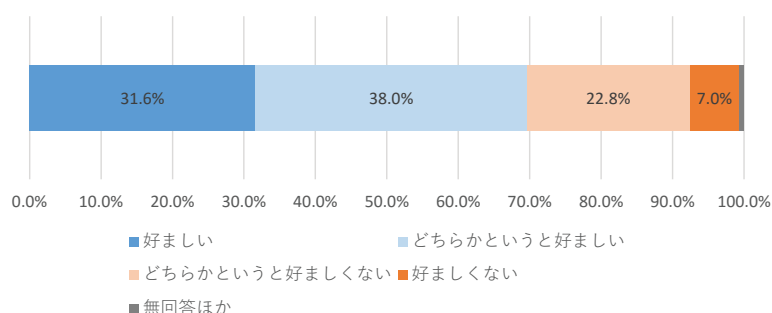
- 科目別WGにおいては、提供されたデータを基に、例えば正答率が極端に低い問題の改善の在り方、正答率が総合的に高い受検者が誤答を選択している問題の分析、成績上位者の識別に寄与する問題と成績下位者の識別に寄与する問題のバランス、識別力が低い問題の分析、各設問において問いたい力と作問のねらいの妥当性等も含めて、大学入学共通テストの問題構成や設問数、内容、配点等の在り方に関する分析・検討を行い、平成30年11月に実施する試行調査に生かすこととする。  
なお、科目別WGにおいては、作問者以外の外部有識者から問題構成、設問数、内容等の妥当性に関するヒアリングも併せて行う。
- 科目別WGにおいては、大学入学共通テストにおける問題の構成・内容を想定しながら、平成30年11月に実施する試行調査の問題構成・内容の検討を行っているところ。その際、平成29年11月に実施した試行調査と同様、前述の①～⑤（P5の【分析・検討方針】枠囲みを参照。）に関するデータを大学入試センター試験の結果に関するデータと比較しながら、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考としつつ、大学入学共通テストにおいて問いたい力を重視した作問の在り方と、選抜試験としてふさわしい難易度や識別力の設定とを両立させるよう検討を進めているところ。
- また、英語教育の改革の方向性の中で各技能をバランスよく評価することが求められていることや、多くの資格・検定試験における四技能の配点の状況等を踏まえ、「リーディング」「リスニング」の配点を等分とすることなどについて、平成30年11月に実施する試行調査において引き続き検証していく。
- 作問者以外の外部有識者からのヒアリングについては、試行調査問題公表時に、各科目等の有識者からいただいた、問題に対するコメントを公表した。さらに、科目別WGにおいては、当該科目等に造詣が深い大学の教員を5名選定し、①出題のねらい、②題材の選定や問題の場面設定、出題形式等、③リスニングの全て2回読みのもので実施する場合と1回読みと2回読みが混在する場合の留意点、④各科目等の問題構成や設問数、内容、難易度等について聞き取りを行った。（概要については、Ⅲ 2 及び 3 に記載。）

## 【発音、アクセント、語句整序に関する分析】

- 発音、アクセント、語句整序の問題については、マーク式問題の形式上問いにくい「話すこと」「書くこと」についても、高校教育を通じてバランスよく指導してほしいというメッセージ性等を踏まえ、これらの技能を間接的に問うことを目的として出題されてきた。  
問題としては安定的な識別性を持つという評価がある一方で、ペーパーの上で話すことを問うたり、マーク式問題で書くことを問うたりする、言語活動から切り離された設問の在り方については、受験のための英語学習を助長するという厳しい指摘もあるところである。  
今後、センターが作問、実施する試験は四技能を問う民間の資格・検定試験との併用となることを踏まえれば、こうしたいわゆる間接問題を出題し続ける必要性は下がってきていると考えられる。この場合、問いの識別性についてはこれまで以上の配慮が求められることに留意しつつ、平成30年度の試行調査については、「読むこと」の能力を問うことを目的とした問題で実施し検証を行う。

## 《教員アンケート調査の回答》

- 発音・アクセント問題を出題していないことについて、どのように考えますか。



《四技能を問う資格・検定試験と併用されることを踏まえ、発音、アクセント、語句整序などの問題を出題しないことについての有識者のコメント》

- ・発音問題は、英語の発音には規則性もあるのに、その例外を狙った出題になる傾向が強くなるという課題がある。
- ・アクセント問題は、発音問題に比べ、「話す」パフォーマンスには近いが、文脈から切り離されて単語だけで出題されることに課題がある。
- ・発音・アクセント問題や語句整序の問題を除いたことで、現実の世界で求められる英語リーディング力をより正確に測定できるテストになっています。
- ・基本的方向性については賛同いたします。
- ・これにより学習指導要領の目指す「コミュニケーション能力の育成」をより反映する出題になっており、プラスの波及効果が教育現場にもたらされると思います。
- ・文法については読解テストの中で、文法が理解できなければ解答できない問いを設定する等の必要があるかと思えます。
- ・明示的な文法知識を問う問題や整序問題なども、今後四技能テストに移行することを考えると不必要だと思います。
- ・四技能の測定を民間テストに委ねるといった観点以外にも、発音問題を筆記試験で試すことの妥当性の問題があると考えます。
- ・「発音、アクセント、語句整序などの問題」を出題しないことは、「大学教育の基礎力となる知識」がどの程度身に付いたかを測らないことになると考えます。平成30年3月公示の高等学校の新学習指導要領でも「発音、アクセント、語句整序などの問題」が測定する構成概念は、「2 内容〔知識及び技能〕」において、高校で学習し、習得すべきものとして規定されています。

### 【聞き取る音声の回数の分析】

- 聞き取る音声の回数についての生徒アンケート（自由記述）では、バージョンA（全て2回読み）、バージョンB（1回読みと2回読みが混在）ともに、1回読みを推す意見、2回読みを推す意見があった。バージョンBでは、2回読みを推す意見が比較的多くなっているが、バージョンAでは、長文は1回読みでもよいという意見も見られた。

一方、教員アンケートでは、バージョンAよりも、バージョンBの方がよいと回答している割合がやや多くなっており、有識者のコメントでも、全て2回読みでなくてもよいとする意見が多かった。

バージョンA、バージョンBの共通問題で読み回数が異なるものを、読み上げテキストの長さで比較（語数が100語以上、100語未満）すると、概ねテキストの長い方が、正答率の差が小さくなっている。

また、信頼性係数（アルファ係数）※は、バージョンAが0.62、バージョンBが0.71となっており、設問数が多いバージョンBの方が信頼性が高い傾向にある。

以上の結果を踏まえつつ、平成30年度試行調査においては、リスニングの読み回数について、1回読みと2回読みが混在している問題で実施し、適切な読み上げ回数の更なる検討を行う。

※ テスト等の信頼性を表す指標。0.7以上であれば、信頼性が高いと判断されることが多い。また、項目間の関連性が強く、項目数が多いと値が大きくなる傾向にある。

《聞き取る音声の回数についての生徒アンケートの自由記述の例》

①バージョンAの生徒

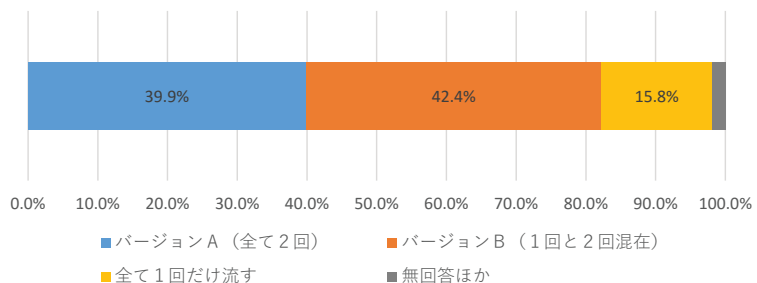
- ・話者がゆっくり話しているのに2回も流す必要はないと思った。
- ・問題によっては、1回でも良い所があったと思う。
- ・2回流さなくても聞きとれる問題もあった。
- ・特にないが、簡単な問題なら1回でもかまわない。
- ・長文は1回でいいと思う。
- ・短い問題文は2回でもいいけど、長いのは1回でいい。
- ・第5問など2回繰り返されても、リスニングが長すぎるから、難しかった。
- ・第1問から第2問までは音声で1回流すだけで十分だと思います。
- ・全部1回でいいと思います。
- ・今のスピードで音声を流すのなら2回のほうがよい。
- ・2回流すのが無難で良いと、思います。
- ・2回ずつあると余裕を持って解答を考えられた。

②バージョンBの生徒

- ・問題の間と問が長かったら、1回で良いが、短かったので、2回がよかった。
- ・流すのは全て1回で良いと思う。
- ・1回でもいいですけど間を多めにってほしいです。
- ・1回か2回か統一してほしいです。
- ・聞き取る音声を流す回数を全部2回にしてくれると、とてもやりやすいと思います。
- ・表があるところは2回流してほしかった。
- ・長文の時は1回よりも2回の方が解答する時間も余裕ができていいと思う。
- ・第1問、第2問は1回でよくて、第4問から最後は2回にしてほしい。
- ・今回のレベルの問題なら2回流してほしい。
- ・1回にするなら、解答時間を長くしてください。
- ・1回だと確認できず、難しい。
- ・2回あった方が問題が解きやすいです。

《教員アンケート調査の回答》

○音声を流す回数について、いずれのバージョンがよいと思いますか。



《バージョンA、バージョンBの共通問題で読み上げ回数が異なるものの読み上げテキストの長さで比較》

①語数が100語未満

問題番号	語数	正答率 (%)		正答率の差
		バージョンA	バージョンB	
3-15	49	60.2	52.5	7.7
3-16	48	54.0	43.7	10.4
3-19	47	39.8	31.8	8.0
5-26	50	22.9	24.6	-1.8

②語数が100語以上

問題番号	語数	正答率 (%)		正答率の差	スクリプトのタイプ
		バージョンA	バージョンB		
4-22	186	60.9	51.0	9.9	説明 (自己紹介) ※46語程度の短文4本の連なり
5-23	253	77.7	75.2	2.5	説明 (講義)
5-(24A-24Z)		12.0	7.8	4.2	
5-25		31.9	33.2	-1.3	
6-27	162	35.2	32.0	3.2	会話・議論 (二人の対話)
6-28		33.2	32.4	0.8	
6-29	220	45.5	40.8	4.7	会話・議論 (意見の表明)
6-30		26.5	24.0	2.4	

※①及び②について、バージョンAの問題は全てバージョンBと共通問題であることから、問題番号はバージョンBのもので示している。

《バージョンA及びバージョンBの信頼性係数》

	設問数	信頼性係数 (アルファ係数)
バージョンA	20	0.62
バージョンB	30	0.71



《バージョンA（全て2回読み）、バージョンB（1回読みと2回読みの混在）それぞれで実施する場合の留意すべき点に関する有識者のコメント》

#### ①バージョンA（全て2回読み）

- ・2回目の読みの前に“Listen again.” と入るのが、少し耳触りに感じた。ポーズを入れることで、音声による指示（Listen again.）は削除してもいいであろう。
- ・従来のセンター試験に近い形で実施できるので、やりやすいという利点はあるかもしれませんが。しかしすべての設問を2回ずつ聞かせるのは、現実のコミュニケーション場面を反映しているとは言い難いと考えます。
- ・2回読みは必要ないと感じるものが多かった。特に第2問までは、基本的な内容の聞き取りで発問もシンプルなものが多いので、2回読みでは間延びした感じを受けた。1回読みとするものと2回読みとするものを厳選する必要があると考える。
- ・まだ聞く準備ができていないのに、問題文の音声が始まってしまう問いが何題かありました。
- ・2回読み上げることが受験者に周知されているということであれば特に問題はないかと思えます。しかしながら、第5問、第6問になると長すぎて集中力が続かなくなる可能性も高くなります。その意味ではバージョンBの方が受験者にとっては受験しやすいのではないかと考えられます。

#### ②バージョンB（1回読みと2回読みの混在）

- ・1回読みと2回読みが混在すると紛らわしくなるので、流す回数を指示している文に下線を引き、太字にしておくのがよい。
- ・こちらのほうが現実のコミュニケーション場面に即しており、妥当性が高いと思います。さらに問題数も増えるので、信頼性も高まります。短いものは2回、しかしまとまった講義などは1回、という今回の方針でよろしいかと思えます。実施前に告知をしておけば混乱なくできると思えます。
- ・なぜ前半（第2問まで）が2回読みで後半（第3問以降）が1回読みなのか、疑問に思った。通常は、前半の基礎的なものを1回読みとし、繰り返し内容を確認したいような内容のものを2回読みとするのではないかと思う。
- ・1回読みでは解答できないのではと感じる難しい問題もあった。例えば、問21については、日本語の指示文を読み、表の概要を捉えるだけでも時間を要するのに、先に述べたように二重の構造によって解答を選ばなければならず、しかも複数解答可なので、感覚的にはあるが難易度がB1レベルを超えているのではないかと感じた。

### 【英語以外の外国語の検討状況】

- 外国語科の「ドイツ語」「フランス語」「中国語」「韓国語」については、英語と異なり、四技能を問う資格・検定試験を活用しないという、2023年度までの方針が示されていることを踏まえ、当該言語の特性を勘案しつつ、今後の問題構成について、関係者の意見を伺っているところ。



## 2 英語（筆記〔リーディング〕）の結果

受検者のほとんどが高校2年生であり、実際の大学入試に向けて今後学力が伸びる可能性がある時期であること、一方で、平成29年度センター試験において、今回の試行調査に協力いただいた高校の平均点の方が、全体の平均点よりも高い傾向にあることも考慮しながら、正答数の分布図では中央からやや多い方に偏っているという結果を分析する必要がある。

無解答率は、後半の設問で増加の傾向を示しているが、最大で5.7%であり全体としては高くなかった。また、今回の試行調査では、現行センター試験とは異なり、問題文をはじめ「当てはまる選択肢を全て選択する問題」等の指示も全て英語で示したところであるが、このことについては、生徒アンケートでは、英語の意味も解答方法も分かったという回答が約70～80%であり、多くの受検者は解答に支障がなかったと考えられる。

なお、教員アンケートでは、発音・アクセント問題を出題していないことについて、好ましいという回答が約70%であった。

平成30年度試行調査に向けては、英語で問題文を指示することや発音、アクセント、語句整序などの問題を出題しないこととする方針を維持して問題作成を行うとともに、提示する文章や資料の分量、問題のバランスなどの一層の工夫を図っていく。

### <問題構成や設問数>

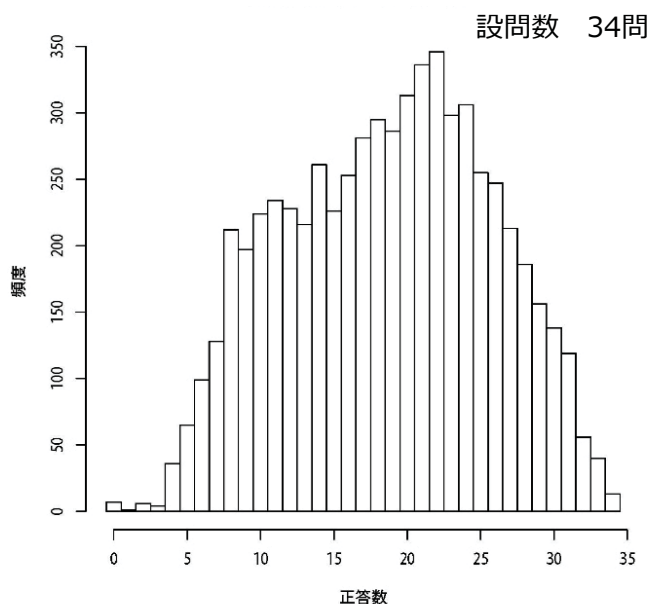
大問数 6題

※問題のねらい等は別冊参照

設問数 マーク34問

- 正答数の分布図では、中央からやや多い方に分布しており、設問正答率幹葉図では、様々な難易度の問題が含まれており、多様な学力層を識別していると考えられる。

《正答数の分布図》



《設問正答率幹葉図》

平均正答率区間 (設問数)	設問番号
95 % ≥	(0)
90 % ~ 95 %	(1) 3
85 % ~ 90 %	(1) 2
80 % ~ 85 %	(1) 1
75 % ~ 80 %	(3) 7,11,30
70 % ~ 75 %	(5) 8,12,13,18,23
65 % ~ 70 %	(3) 5,21,33
60 % ~ 65 %	(2) 10,25
55 % ~ 60 %	(5) 4,14,16,(31)[2],[32][3]
50 % ~ 55 %	(7) 15,20,22,24,28,29,38
45 % ~ 50 %	(5) (9)[1],17,(31)[4],[32][5],34
40 % ~ 45 %	(1) (9)[3]
35 % ~ 40 %	(4) 6,28-29-30,(32)[6],35
30 % ~ 35 %	(3) 19,26,36
25 % ~ 30 %	(2) 27,37
20 % ~ 25 %	(1) 34-35
15 % ~ 20 %	(1) 32
10 % ~ 15 %	(2) 9,31
5 % ~ 10 %	(1) 31-32
< 5 %	(0)

※設問番号は、解答番号や選択肢番号を指す。

例1) 「3」→解答番号「3」

例2) 「(31)[2]」→解答番号「31」 選択肢番号「2」

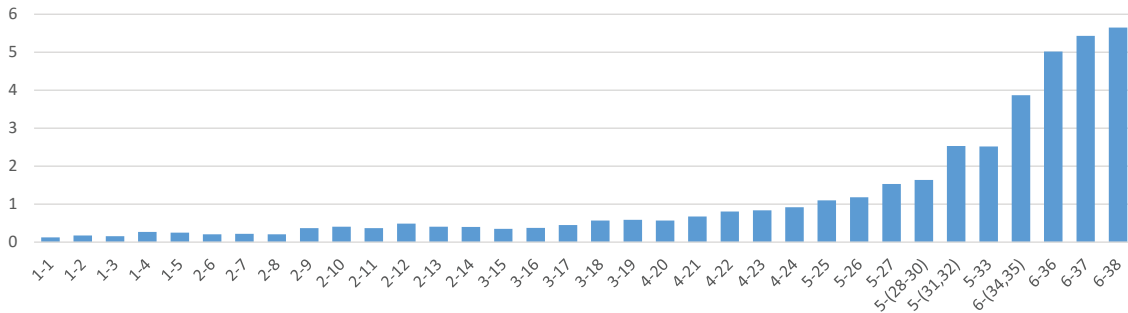
※複数を選択する問題は、問題としての正答率と、解答番号ごと又は選択肢ごとの正答率を記載。

例) 小問 31-32 解答番号ごと 31、32  
 選択肢ごと (31)[2]、(31)[4] など

○ 無解答率は、後半の設問で増加の傾向を示しているが、最大で5.7%であり全体としては高くなかった。生徒アンケートにおいては、試験時間が短かったという回答が約50%、問題の量（文章や資料等）が多かったという回答が約70%、問題が難しかったという回答が約60%であった。

また、今回の試行調査では、現行センター試験とは異なり、問題文をはじめ「当てはまる選択肢を全て選択する問題」等の指示も全て英語で示したところであるが、このことについては、英語の意味も解答方法も分かったという回答が約70~80%であり、多くの受検者は解答に支障がなかったと考えられる。

《設問別無解答率（%）》

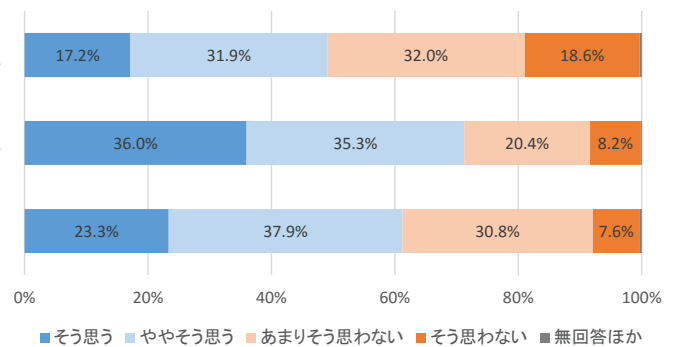


《生徒アンケート調査の回答》

①問題を解く上で、試験時間は短かったですか。

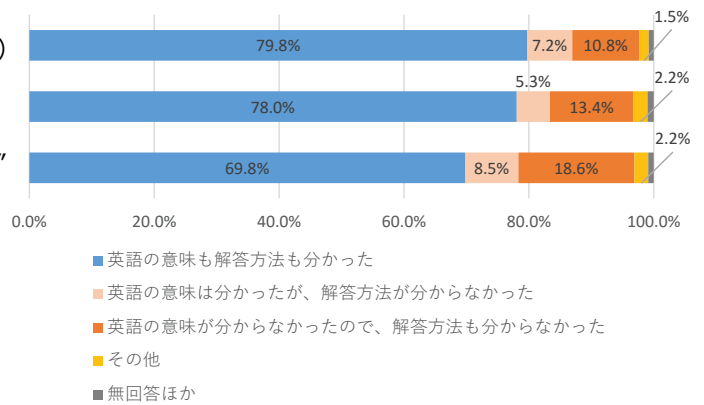
②問題の量（文章や資料等）は多かったですか。

③問題は難しかったですか。



④問題文の指示内容は分かりましたか。

- ・“You may choose more than one option.”（第2問問4）
- ・“You may use an option only once.”（第5問B問1）
- ・“You may choose more than one option for each box.”（第5問B問2）



○ 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。

1. 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題  
該当する問題はなかった。
2. 新しい出題形式等
  - ① 当てはまる選択肢を全て選択する問題  
2問出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。
3. その他
  - ①新聞のコラムを読んで、概要を把握する問題
  - ②記事の段落ごとの要点を把握する問題
  - ③物語を読んで概要（話の流れ）を把握する問題
  - ④記事を読んで反対意見を把握する問題
  - ⑤レポートを読んで書き手の予定を把握する問題

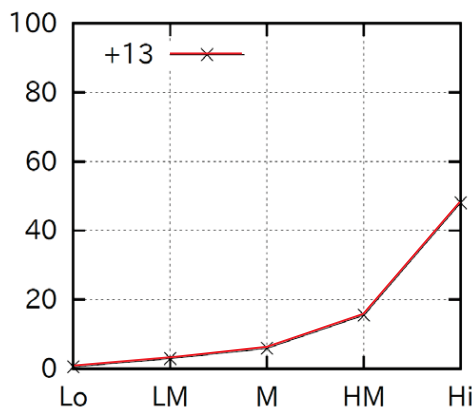
〈新しい出題形式等〉

①当てはまる選択肢を全て選択する問題

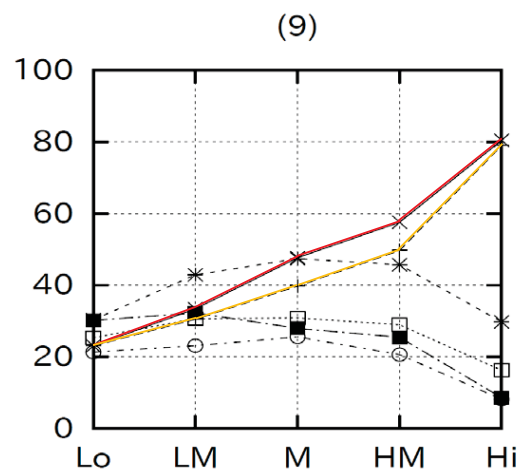
第2問A問4  
9 (解答番号9)

多肢選択  
選択肢数6  
全て選ぶ  
完答（正答二つ）

正答率 14.0%



参考：各選択肢ごとの五分位図



選択肢6が錯乱肢として機能した。

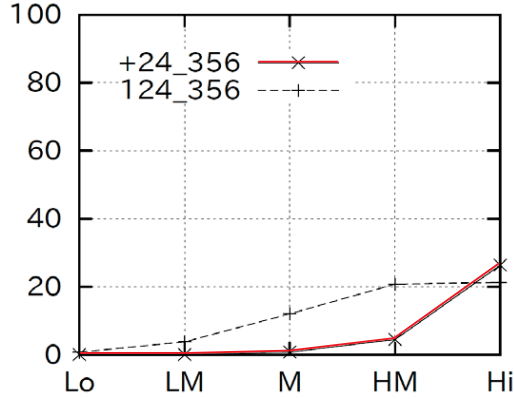
Lo群とHi群の正答率の差が40ポイント以上あった。特に、Hi群の識別に寄与している可能性がある。しかし、正答を二つで完答としたため、難易度が高くなった。なお、当てはまる選択肢を全て選択する問題については、マークの読み取り方など、実施上の課題も併せて検討する必要がある。

- +1 — x —
- +3 — + —
- 6 - - - \* - - -
- 2 ···· □ ····
- 5 - - - ■ - - -
- 4 - - - ⊖ - - -

第5問B問2  
(解答番号31,32)

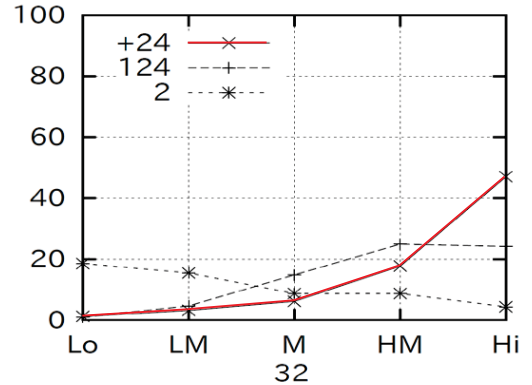
31-32

多肢選択  
選択肢数6  
全て選ぶ  
完答  
(正答 31:二つ  
32:三つ)  
正答率 6.0%

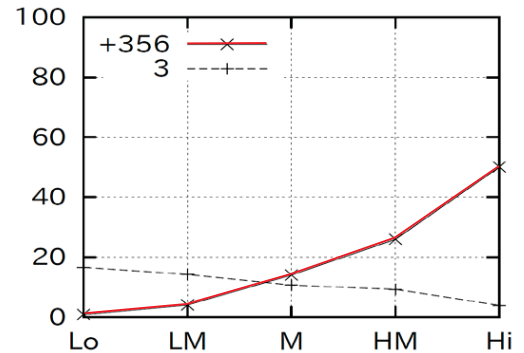


参考：各解答番号ごとの五分位図

31



32



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント程度であり、特に、Hi群の識別に寄与している可能性があるが、解答番号31と32をそれぞれ二つと三つで完答としたため、Hi群でも正答率が20%程度となっており、難易度が高くなった。

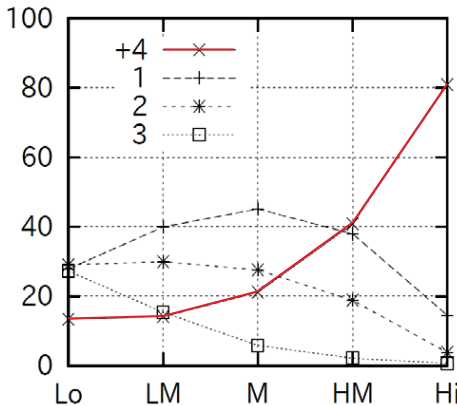
解答番号31では、正答選択肢2及び4に加えて誤答選択肢1を選択している受検者が一定程度おり、これらの者は、全ての選択肢を選択しなければならないと考えた可能性がある。解答番号32では、識別力をある程度確保できていることから、二つを独立して問うか、部分点を与えるなどの工夫をすれば、正答率が上がり、識別力も向上すると考えられるが、配点の在り方については実施上の課題と併せて検討していく。

〈その他〉

①新聞のコラムを読んで、概要を把握する問題

第3問B問3  
(解答番号19) 19

多肢選択  
選択肢数4  
正答率 33.2%

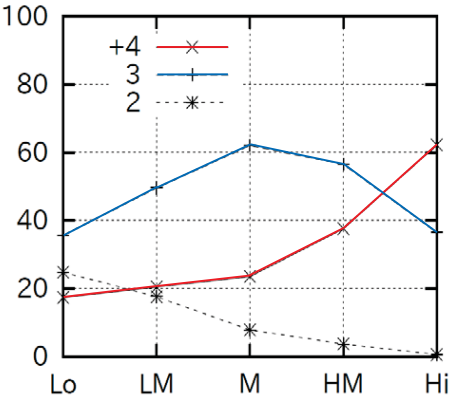


本文（コラム）全体の概要を把握し、最終段落における筆者の心情を正確に捉えさせる問題である。HM群とHi群の正答率の差が、40ポイント程度あることから、Hi群の識別に寄与している可能性がある。

②記事の段落ごとの要点を把握する問題

第5問A問2  
(解答番号26) 26

多肢選択  
選択肢数4  
正答率 31.6%



編集集中の学校新聞の記事を読んで、第3段落と第4段落の要点および執筆者の意図を把握する問題である。書き手の意図を踏まえずに例示だけを捉えると、選択肢3を選ぶ傾向があるため、結果としてこの選択肢がHi群の識別に寄与している可能性がある。

③物語を読んで概要（話の流れ）を把握する問題

第6問問1

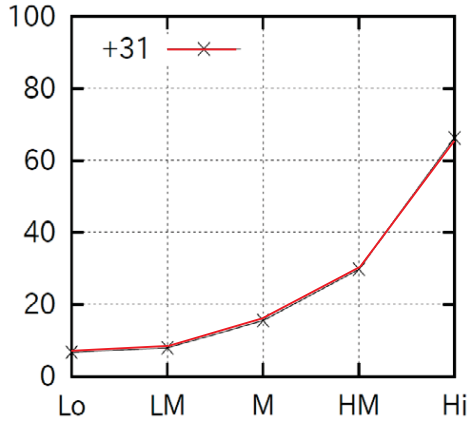
34-35

(解答番号34,35)

多肢選択

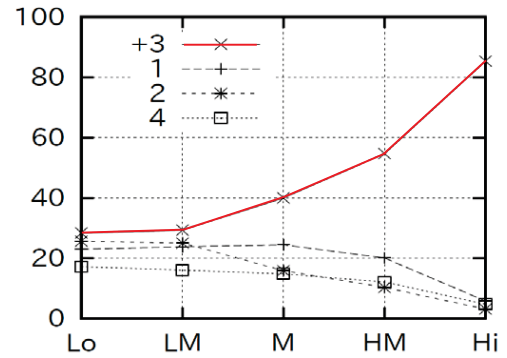
選択肢数各4

正答率 24.5%

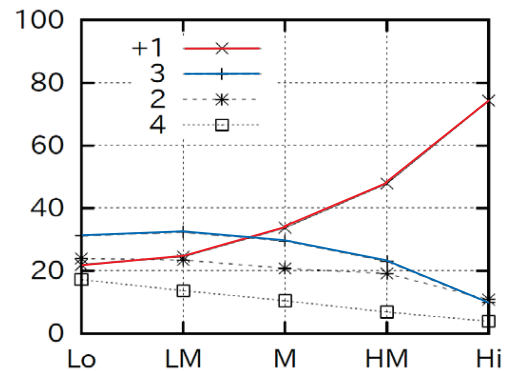


参考：各解答番号ごとの五分位図

34



35



M群とHi群の正答率の差が40ポイント以上あり、特に、Hi群の識別に寄与している可能性がある。

物語の概要（ストーリーの流れ）を把握する問題で、解答番号34及び35の両方に正解する必要があるため、難易度が高まったと思われる。

解答番号34及び35では、35の方がやや難易度が高かった。解答番号35では、物語の流れを正確に捉えていないと、主人公に期待する行動として選択肢3を選ぶ傾向があるため、結果としてこの選択肢が、M群からHi群の識別に寄与している可能性がある。

④記事を読んで反対意見を把握する問題

第2問B問3

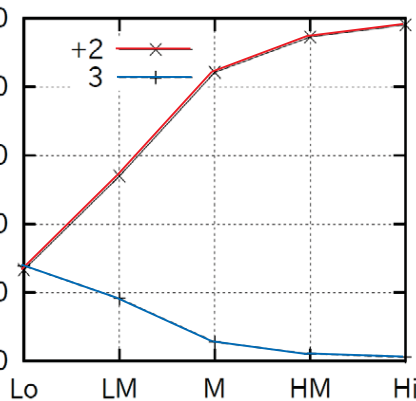
12

(解答番号12)

多肢選択

選択肢数4

正答率 72.0%



M群からLo群までの識別に寄与している可能性がある。この設問は、学生のアルバイトに関する記事を読んで、事実と意見を整理し、アルバイトを行う学生に反対する意見の把握が求められた。

反対意見を正確に捉えることができないと、本文中に記載がないにもかかわらず、反対意見として挙げられそうな選択肢3を選択する傾向があるため、結果として、この選択肢がM群からLo群の識別に寄与した可能性がある。

⑤レポートを読んで書き手の予定を把握する問題

第4問問4

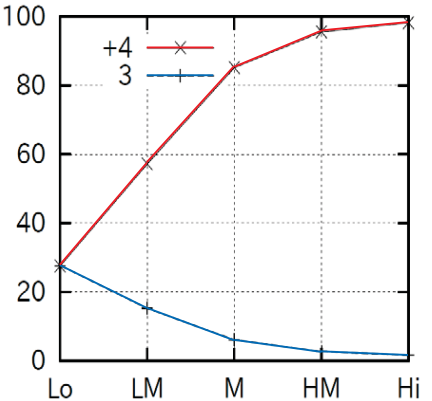
23

(解答番号23)

多肢選択

選択肢数4

正答率 73.2%



M群からLo群までの識別に寄与している可能性がある。この設問は、ボランティアに関する二人の生徒のレポートを読んで、双方の書き手が今後行う予定の把握が求められた。一人目の生徒の意図と行動予定を把握できても、二人目の生徒について把握できないと選択肢3を選ぶ傾向があるため、結果として、この選択肢がM群からLo群の識別に寄与している可能性がある。



○ アンケート調査の自由記述については、次のとおりである。

《教員アンケート 例》

- ・ 英文の難易度は現行のセンター試験に比べ、易し目ではあるが、分量の多さと一つの設問に対して考える時間が長くなったことで、解きがいのある試験であると思う。（英訳和訳中心の授業スタイルから脱却する時代がきたと実感した）
- ・ 発信を前提にした情報収集や、授業内で実際にやる活動（ディベート、プレゼン、書評作りなど）を意識されているので、生徒にとっては、授業でやっていることと試験で問われることがつながるので、全体としてはいい方向への変化だと感じました。語彙レベルも適切でしたが、やや易しいようにも感じました。部分的には少し難しめの読みものの概要をつかむ、というものがあってもいいように思います。
- ・ 読む量に慣れることと、論理的に読み解く力をさらにつけていかなければならないと感じた。
- ・ 第5・6問は一見新しいが、授業でよくやっていること（英語で要約、まとめ、発表など）なので、高校生はとっつきやすいと思う。
- ・ より実践的なリーディングを測る問題になっていると思う。難易度も分量も適切であり、内容的にもおもしろい問題が多かった。読みながら考えさせられた。この分量の英文を80分間、ねばり強く、かつ楽しみながら読める生徒に育てたいという感想を持った。
- ・ 複数回答を設けたことで消去法のテクニックだけでなくよく考えることにつながると思われる。
- ・ 実際の使用場面が明確に示されており、生活や活動に則した英語を読む力の測定に目的が絞られている。アカデミックな内容や思考力を問うような問題が見られず、大学入学後の使用に耐えられる英語力が測られるのかやや心配である。
- ・ バリエーション豊かな設定や状況に応じて、どのような事実を読み取るのか、推測をするのか、総合的に情報を整理できる力が求められていると感じました。普段の授業を通して、生徒にこのような力を養うためには、速読や多読など多様な方法と広告、新聞、物語、ディベートの資料など多様な英文を扱う必要があると感じました。
- ・ 文法、語法など覚えてさえいけば答えられる問題がなくなったのはよいと思う。今後の指導法が問われる。
- ・ 「読むこと」に主眼を置いているのは理解できるが、従来の文法や語彙を問う問題もある方が好ましいと思う。理由は、文法の学習は第二言語習得において必須だと考えているが、最終的なゴールにわかりやすい文法問題がないと学習者の文法・語彙学習への意欲低下が考えられるため。

《生徒アンケート 例》

- ・ 楽しいテストでした。問題文も複雑でなく、スラスラ進めることができました。ただ、このテストだと、あまり、一人ひとりの点数に差をつけることができないのではないかと感じました。
- ・ 従来のセンター試験に比べて、長文を読んで根拠を探し、選択肢と照らし合わせるだけでなく、根拠からわかることを自分で考えないといけなかったのが、センター試験よりも思考力がある試験だと思った。
- ・ 絵や表など、工夫されていて、見やすかったです。
- ・ 一つ一つの内容自体は、そこまで難しくなかったが、量が多かったため、解くのに気力があると思った。
- ・ すべて英語で書かれていて問題の答えの書き方にとまどってしまったけど、なれてくれば、スムーズにできました。
- ・ 自分が勉強している「受験英語」という感じがなかった。このようなより変化をもっと早く起こしてほしかった。
- ・ どちらかという設問の方が問題文に比べて難しかった。
- ・ しっかりと読み考えないとほぼ全てが解けないテストだったので時間内に終わらせるには少々ハードなものだったと思います。
- ・ 以前のものに比べ、より正確さと速読力が求められるテストになった。複数回答可の設問は難易度が高くなっており、特にそこで時間をとられた。問題が単調で、集中力の維持に苦労した他、選択肢の微妙なニュアンスのちがいにとまどった。
- ・ 一つの問題がページをまたぐとやりづらいので、本文・問題選択肢を見開きで全部見えるように、ページをめくらなくていいようにしてほしい。
- ・ グラフや表は、英文と同じページにあってほしい。
- ・ 日本の学校ではよく文法について問われるので、文法問題を入れるべきだと感じた。
- ・ 長文が多くて疲れた。
- ・ 字体が転々と変わるのが、ちょっと読みづらいです。

## 《有識者のコメントの概要》

### ○出題のねらいに照らした作問について

#### ①評価すべき点

- ・ 作問のねらいとするポイント（構成概念）として示されている内容をうまく反映した問題である。与えられた英文の情報を的確に把握し処理できるかを測定できるテストであるというのが全体的な印象である。用いられているテキストが多種におよび、（作問者の負担は大きいかと想像するが）non-prose（表やグラフ）なども含まれていて、母語で行う読解活動をも反映している。
- ・ 高校生の英語リーディング力を測定するテストとして、よく考えられて設計されており、妥当性の高いものだと思います。学習指導要領で求めている能力をCEFRレベルのA1からB1と設定している点は現実を踏まえたものであると思います。各大問で求められる能力が明確に示されており、それに沿った出題になっているのは大変評価できます。
- ・ ウェブサイト、店舗の評価、旅行記など実際に高校生が英語を読む場面が良く反映された出題になっており、使用されている語彙や表現も概ね高頻度であり、高校生に習得してもらいたいものに絞られています。後半には読んだ内容の要点を把握したり、情報をまとめて分類したりする設問もあり、受験者の思考力や判断力を問う良問が多く出題されている点も、高く評価できると思います。指示文も英語になっていますが、高校生にも十分理解できるものであるとの印象でした。共通テストは基本的にこの方向性でよろしいのではないかと思います。
- ・ webpageやイベントのポスター、口コミサイトなど、身近でup-to-date（現代的）かつauthentic（真正）な幅広く多様な場面を想定しており、測ろうとする資質・能力などから考えて作問のねらいも明確で、言語の使用場面の例、言語の働きなどにおいて、扱われている題材・内容ともに適切である。
- ・ イラストや記号の活用や主語を省略した標記など場面に応じたカジュアルな親しみやすい状況を作っており、現実的な内容で受験生のモチベーションにつながっている。
- ・ すべての設問について英語での指示が与えられていることを評価。You を主語としての場面設定が受験生のすべき内容をわかりやすく伝えている。
- ・ 最初に明細書（specification）の大枠を作成し、それに基づいて作問がなされている点が、各段階で求められる力を漏れなく測定するために有効に機能していると思います。

- ・ 全体として難易度が段階を経て高くなるように練られた問題だと思います。
- ・ 英文のトピック、およびジャンルも限られた範囲ながらも多様であり、バランスがとれています。
- ・ 特に第5問Bは英文のみならず課題もauthenticity（真正）であり、多くの受験者が実践力を試されているととらえることでしょう。

#### ②改善すべき点

- ・ CEFR A1とA2の差は、明確には判断できないように感じた。英文のreadability（読みやすさ）や量との関係もあるので、作問ポイントとしてはA1とA2の違いを明確にしたとしても、それが必ずしも正答率に影響しているようではない。
- ・ A1をさらにA1らしい設問にするには、11頁の「国の指標形式の主な目標」にあるA1の「ごく短い物語」・「ごく短い説明」をA2と差別化できるようにする必要がある。
- ・ 文字情報だけでなく、様々な視覚情報を組み合わせる設問が含まれているのは大変良いと思います。ただ、そのために本文を読まずとも視覚情報のみで解答できる設問にならないよう気を付ける必要があると思います。本文を読まずとも選択肢だけで解答できる設問も避けるべきです。
- ・ イラスト等を多用することで、英文が読めていなくても解答がわかってしまう点に配慮した方がよい。
- ・ 非言語情報と問題文から推論（inference）で解答できてしまう課題が散見されます。
- ・ 全体を通して、CEFRと課題の距離が大きすぎるという印象を受けます。「知識・技能」がどのように問われているのかがはっきりしません。（中略）測定対象能力とテスト問題のつながりをより明示的にする必要があるのではないかと思います。

#### ③その他

- ・ 筆記の解答番号31と32の場合のように、「両方をそれぞれ過不足なくマークしている場合のみ正解とする。」のは受験生に厳しすぎると感じました。正答率が6.2%（速報値）と低いですが、受験生の読むこと的能力を正確に反映していないかもしれません。

## ○題材の選定や問題の場面設定、出題形式等について

### ①評価すべき点

- ・使用されている英文は、受験者層が抵抗なく理解できるものであり、場面や状況の設定も的確である。検定教科書で扱われる領域から逸脱するものはなく、高等学校での教育が反映し易い問題であることから、学習とテストの良好な関係が得られると感じた。
- ・発音・アクセント問題や語句整序の問題を除いたことで、センター試験よりも、現実の世界で求められる英語リーディング力をより正確に測定できるテストになっていると思います。題材も実際の高校生が目にしそうなものが選ばれており、場面設定も目標言語使用領域が反映されていると思います。読んだ情報を整理し、統合して解答させるような思考力・判断力を問う問題も良問ぞろいだと思います。
- ・語句の整序問題や語法問題、語彙問題など単独の問題を排除し、さまざまな実際のコミュニケーションの場面を設定している点を評価。
- ・第1問や第2問など実際のwebsite（ウェブサイト）やポスター等を想定した図を多用し、センテンスだけでなく、図からも読み取らせるのは、思考力を試すのにふさわしい。また、例えば第2問Aなどについて、文字から直接読み取れる内容を解答するのではなく、内容が理解できていなければ解答できない良問だと思う。
- ・「実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視」という方針は、新しい高等学校の学習指導要領でも一層重視されたことであり、評価できます。各問いの英文指示文で場面、目的、状況が説明されており、受験生が読み手として置かれた自分の立場をよく理解して解答に取り組むことができます。
- ・各課題の難易度に配慮が見られます。すなわち、大学入学のためにはこのくらいはできていなければならないという最低限の英語力を測る指標が得られるようにさまざまな難易度がカバーされています。
- ・「思考力、判断力」をあわせて検証しようとする問題が複数課されており、単に英語の単語文法を知っているだけでは答えられないように工夫されています。特に第5問、なかでも特にB、第6問などは特に練られています。

### ②改善すべき点

- ・問題のねらいとして、CEFRのA1～B1を組み合わせるとのことになっているが、教育現場の先生方にさらにわかりやすくする工夫が必要ではないだろうか。
- ・試行問題くらいの分量が高校生には上限であるという印象を持ちました。あまり読む量を増やしすぎて、スピード・テストにならないように留意していただきたいです。
- ・5つ完答で配点は難易度が高くなりすぎる。
- ・第5問A 学校新聞の編集者として依頼を受け、新たな情報を見つけてMary が書いた記事に書き加えるという設定。知識・技能面での書くことの要素を意識したものか。何となく設定に不自然さを覚える。
- ・ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）はdomain（領域）を用いて、personal domain（私的領域）、public domain（公的領域）、occupational domain（職業領域）、educational domain（教育領域）の4つのdomainsで場面や状況を説明しています。大学入学共通テストのねらいが、「高校教育を通じて、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問う」ことにあるとき、読むことの領域での思考力、判断力、表現力の評価では、educational domain（教育領域）のtexts（テキスト）に示されているtextbooks（教科書）、readers（読み物）、reference books（参考図書）といったテキストタイプの読み取りを今回の作問より多く出題すべきではないでしょうか。
- ・「知識の理解の質を問う問題」の意味がそもそも理解しかねるのですが、問題群を見ても具体的にどのように反映されているのかが不明です。目的の定義により具体性を持たせる必要があるかと思います。
- ・語彙の問題は独立して問う必要があるのではないのでしょうか。文法については読解テストの中で、文法が理解できなければ解答できない問いを設定する等の必要があるかと思います。



## ○問いのバランスを図る上で、留意すべき点

- ・ 正答率の低い項目を見てみると、下位3問が、すべて完全解答のみ正解とされている項目であった（第5問・設問2が最低の正答率6.2%、第2問A・4 13.6%、第6問 1(a)(b) 25.1% ※すべて速報値）。部分的に正解しているにもかかわらず、得点が得られないため、完全解答という採点法によって難易度があがってしまっているが、もしこれが公平な判断やテスト得点の信頼性に影響を与えているなら、採点方法を変更する必要があると感じた。
- ・ 読むべきパッセージの総語数が多くなり過ぎないように留意していただきたいと思います。
- ・ 本文の直接的な言い換えによる解答となっていた。解答としての妥当性を保証するあまりに、本文と選択肢の言い換えが直接的になりすぎないことが重要だと思う。
- ・ 大学入学共通テストのねらいが、「高校教育を通じて、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問う」ことにあり、「実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視」という方針を持つとき、（中略）大学入試で書面の媒介技能（日本では英文和訳力と和文英訳力ほか）を測ることは、大学入学後にEMI (English Medium Instruction)（英語を媒介とした指導）が行われるか否かにかかわらず、日本のEFL環境（英語を外国語として使用する環境）で求められることと思います。こうした技能は国公立大学の個別試験では測られますが、個別試験を実施しない私立大学等が存在することを考えると、大学入学共通テストでマークシート方式で適切な和訳や英訳を選ぶ問いなどを出題して媒介技能を測定して、リーディングの問いのバランスを図ってはいかがでしょうか。

## 3 英語（リスニング）の結果

受検者のほとんどが高校2年生であり、実際の大学入試に向けて今後学力が伸びる可能性がある時期であること、一方で、平成29年度センター試験において、今回の試行調査に協力いただいた高校の平均点の方が、全体の平均点よりも高い傾向にあることも考慮しながら、結果を分析する必要がある。

無解答率は、バージョンA（全て2回読み）よりも、バージョンB（1回読みと2回読みが混在）の方が高い傾向にあるが、最大でも2.8%であり、全体として高くなかった。バージョンA、バージョンBともに、問題を解く上で解答を考えるための時間が短かった、問題は難しかったという解答が、約80%から約90%と高く、問題の難易度が高く、思考する時間が短かった可能性がある。

なお、アメリカ英語以外の読み上げについては、有識者のコメントにおいて、肯定的に評価する意見が多かった。

平成30年度試行調査に向けては、リスニングの読み回数については、1回読みと2回読みが混在している問題で実施し、正答率や得点分布のバランスに配慮した各設問の難易度の検討を引き続き行うとともに、試験時間と問題の量（文章量、複数の題材を用いた問題の数、図表等の資料の数等）のバランスを図っていく。

### <問題構成や設問数>

大問数 6題（バージョンA、Bともに同じ）

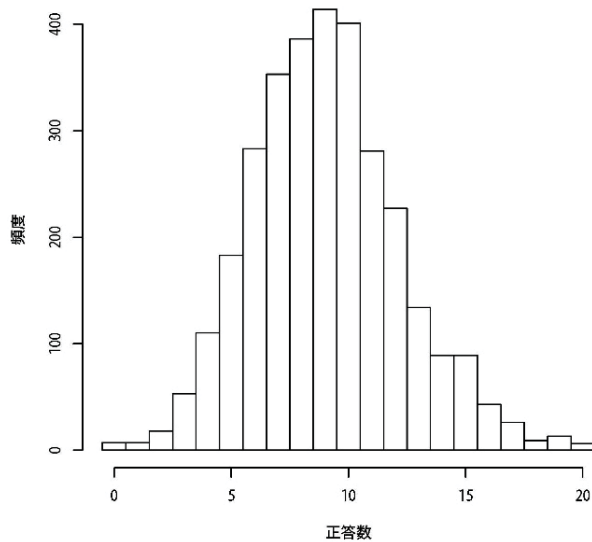
※問題のねらい等は別冊参照

設問数 バージョンA：マーク20問 バージョンB：マーク30問

- 正答数の分布図では、バージョンAでは、左右対称に近く、バージョンBでは、中央からやや少ない方に偏っている。設問正答率幹葉図では、バージョンBにおいて、正答率が低い問題がやや多い。  
また、バージョンAにおいては、問題数が少ないことから、同じ正答数に400以上集まる傾向が見られる。

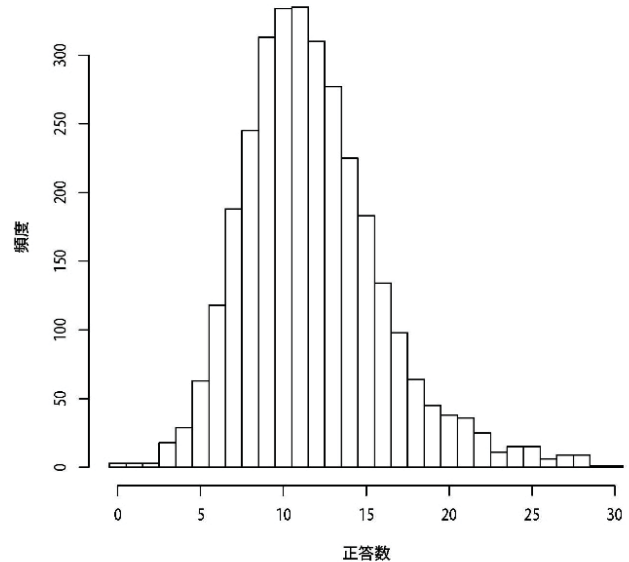
《正答数の分布図：バージョンA》

設問数 20問



《正答数の分布図：バージョンB》

設問数 30問



《設問正答率幹葉図：バージョンA》

平均正解率区間 (設問数)	設問番号
95% ≥	(0)
90% ~ 95%	(0)
85% ~ 90%	(2) 5,(19)[1]
80% ~ 85%	(1) (19)[4]
75% ~ 80%	(1) 13
70% ~ 75%	(1) 8
65% ~ 70%	(1) (14A)
60% ~ 65%	(3) 9,12,(14X)
55% ~ 60%	(3) 2,(14B),(14Z)
50% ~ 55%	(3) 1,10,(14C)
45% ~ 50%	(4) 6,7,(14Y),19
40% ~ 45%	(0)
35% ~ 40%	(2) 11,17
30% ~ 35%	(2) 15,18
25% ~ 30%	(2) 3,20
20% ~ 25%	(1) 16
15% ~ 20%	(0)
10% ~ 15%	(2) 4,14
5% ~ 10%	(0)
< 5%	(0)

《設問正答率幹葉図：バージョンB》

平均正解率区間 (設問数)	設問番号
95% ≥	(0)
90% ~ 95%	(0)
85% ~ 90%	(2) 7,(29)[1]
80% ~ 85%	(2) (20A),(29)[4]
75% ~ 80%	(2) 12,23
70% ~ 75%	(1) 14
65% ~ 70%	(1) (20D)
60% ~ 65%	(2) (20B),(20C)
55% ~ 60%	(3) 2,13,(24A)
50% ~ 55%	(9) 1,11,15,17,20,22,(24B),(24X),(24Z)
45% ~ 50%	(2) 10,(24C)
40% ~ 45%	(3) 16,(21A),29
35% ~ 40%	(1) (24Y)
30% ~ 35%	(5) 19,(21C),25,27,28
25% ~ 30%	(2) 3,(21B)
20% ~ 25%	(3) 4,26,30
15% ~ 20%	(2) 5,(21D)
10% ~ 15%	(3) 6,9,18
5% ~ 10%	(2) 8,24
< 5%	(1) 21

※設問番号は、解答番号や選択肢番号を指す。

例1) 「5」→解答番号「5」

例2) 「(19)[1]」→解答番号「19」 選択肢番号「1」

※複数を選択する問題は、問題としての正答率と、解答番号ごと又は選択肢ごとの正答率を記載。

例1) 小問 14 解答番号ごと (14A)、(14B)など

例2) 小問 19 選択肢ごと (19)[1]、(19)[4]など

※設問番号は、解答番号や選択肢番号を指す。

例1) 「7」→解答番号「7」

例2) 「(29)[1]」→解答番号「29」 選択肢番号「1」

※複数を選択する問題は、問題としての正答率と、解答番号ごと又は選択肢ごとの正答率を記載。

例1) 小問 20 解答番号ごと (20A)、(20B)など

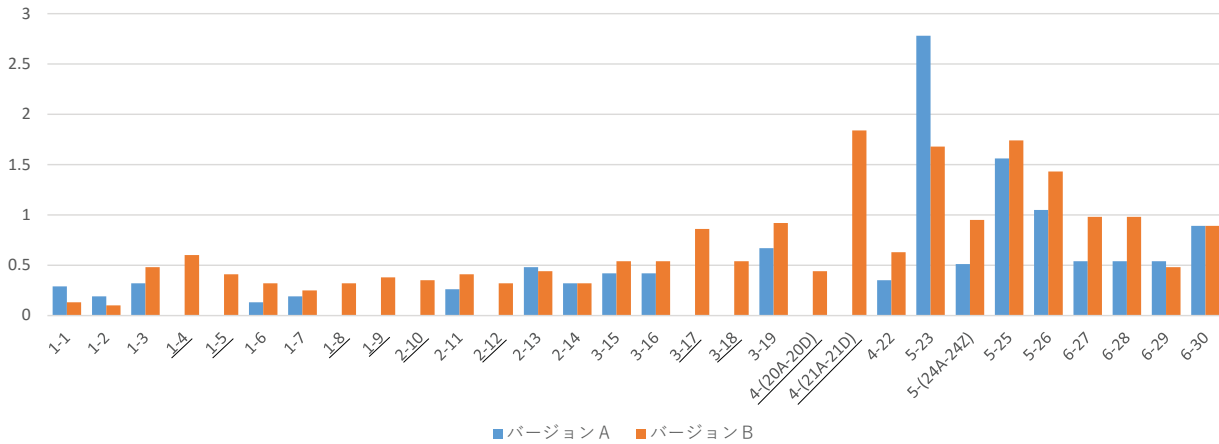
例2) 小問 29 選択肢ごと (29)[1]、(29)[4]など



○ 無解答率は、バージョンAよりも、バージョンBの方が高い傾向にあるが、最大で2.8%であり全体として高くなかった。また、生徒アンケートにおいては、バージョンA、バージョンBともに、問題を解く上で解答を考えるための時間が短かった、問題は難しかったという解答が約80~90%と高いことから、問題の難易度が高く、思考する時間が短かった可能性があるが、バージョンAの方が、全て2回読みであることから、バージョンBと比べて、問題の指示文等に目を通す時間や解答を考える時間に余裕があったことも伺える。

平成30年度試行調査に向けては、試験時間と問題の量（文章量、複数の題材を用いた問題の数、図表等の資料の数等）のバランスを図っていく。

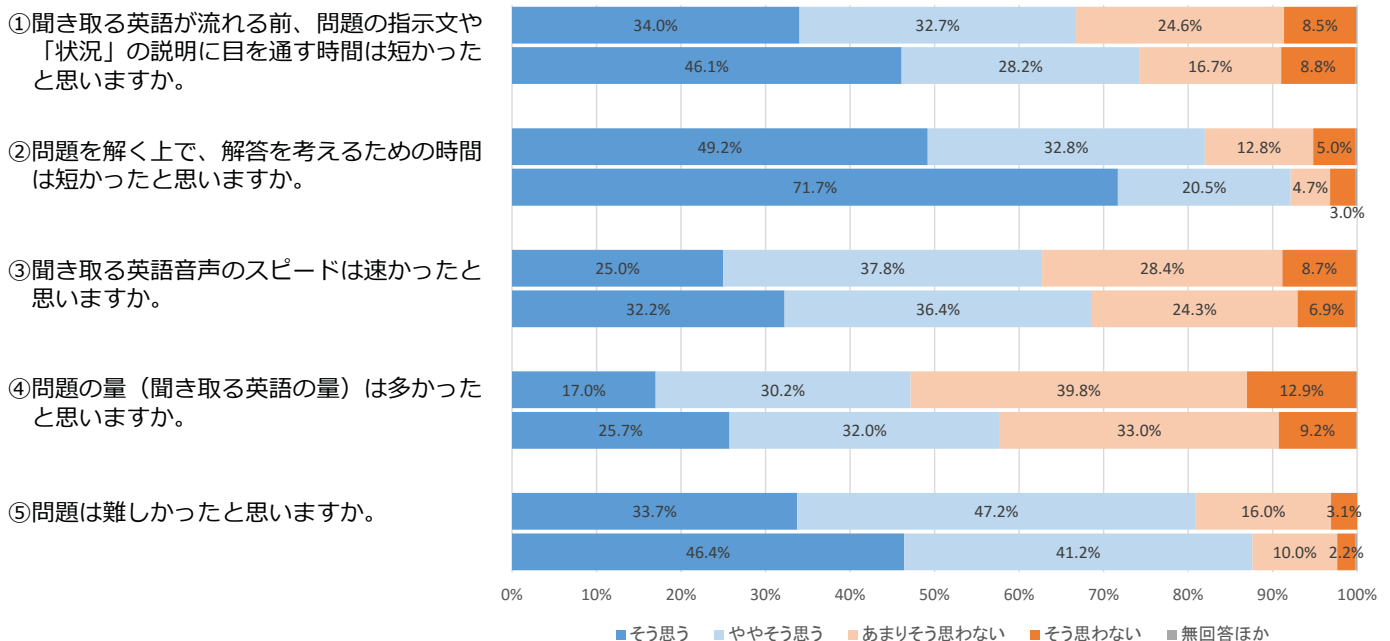
《設問別無解答率（%）》



※バージョンAの問題は、全てバージョンBと共通問題であることから、問題番号はバージョンBのもので示している。  
 ※問題番号のうち下線のあるものは、バージョンBのみで出題していることを示す。

《生徒アンケート調査の回答》

上段：バージョンA  
 下段：バージョンB



○ 各小問と、当該小問を除いた全問題との間のピアソンの積率相関係数を算出し、さらに、五分位図により分析を行った。また、新たな出題形式等についても分析を行った。

1. 五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題

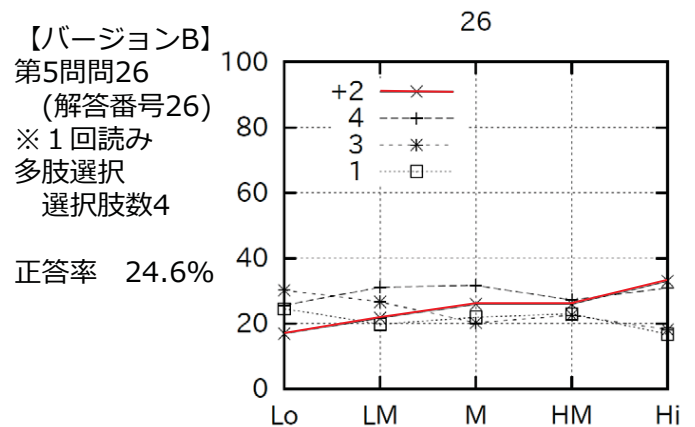
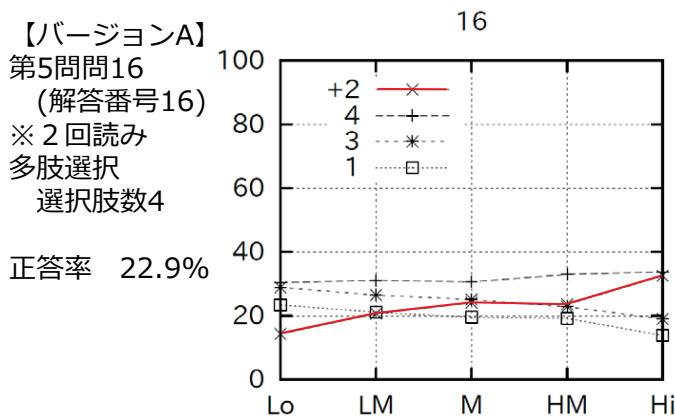
バージョンAが1問、バージョンBが5問あり、その全ての問題について、五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。

2. 新しい出題形式等

① 当てはまる選択肢を全て選択する問題

各1問（バージョンA、B共通）出題。五分位図、各小問のねらい等を踏まえ、分析を行った。

〈五分位図におけるLo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の問題〉

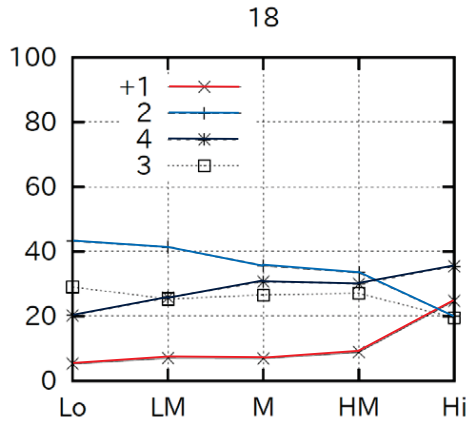


バージョンAとバージョンBの共通問題で読み上げ回数だけが違う問題である。Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- ・ 講義内容と図表から読み取れる情報を総合して解答する問題であり、複数の情報を合わせ、要点を捉える必要があることから、受検者にとって新しい出題傾向となったことが、読み上げ回数を問わず、影響した可能性がある。
- ・ 聞き取る講義や冊子に印刷されている図表を吟味する時間が十分でなかった可能性がある。 等

【バージョンB】  
第3問問18  
(解答番号18)  
※1回読み  
多肢選択  
選択肢数4

正答率 10.9%

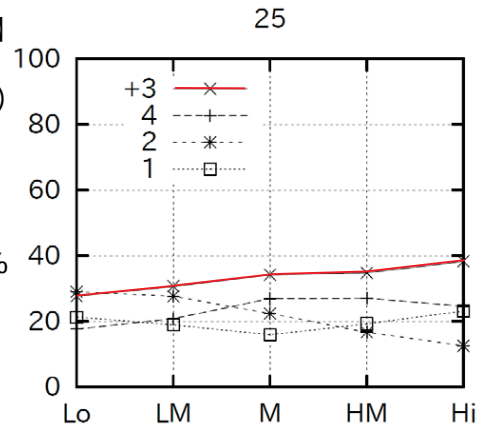


バージョンBのみで出題された問題である。Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- ・ レストランの客と店員の対話を聞いて要点（客の行動）を把握する問題であるが、客の最後の発話までしっかりと聞かないと、料理を出し直すものと判断してしまい、選択肢2、4を選択する傾向にあった可能性がある。等

【バージョンB】  
第5問問25  
(解答番号25)  
※1回読み  
多肢選択  
選択肢数4

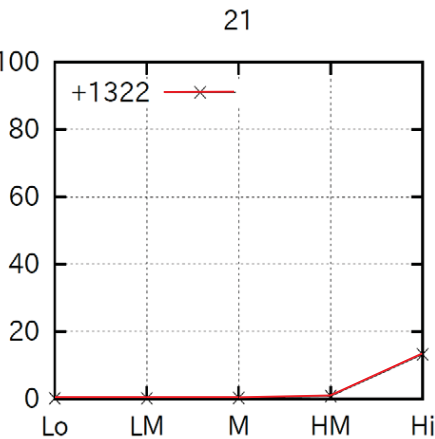
正答率 33.2%



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。（両バージョンの共通問題であるが、バージョンAではその差は20ポイント以下ではなかった。）

- ・ 講義を聞き、その概要を捉える問題である。受験者にとって聞き取る量が多く、Hi群でも十分概要を把握できなかった可能性がある。
- ・ 短時間でやや長めの選択肢を読まなければならなかったため、英語を読む負荷がかかってしまった可能性もある。等

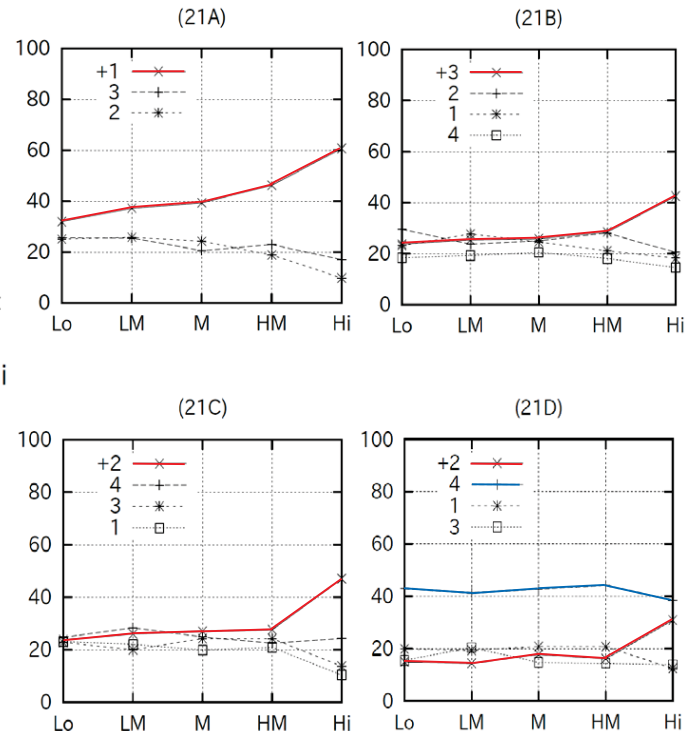
【バージョンB】  
第4問A問21  
(解答番号21)  
※1回読み  
多肢選択  
選択肢数4  
(複数回使用可)  
完答  
正答率 3.1%



バージョンBのみで出題された問題である。Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。

- ・ 説明を聞き、必要な情報（チームの分け方）を聞き取る問題であるが、問題冊子に示された8名分の姓名とそれぞれの英語圏における経験年数を見ながらチーム分けをするという問題設定は、短時間で多くの情報を処理する必要があり、理解するための負荷がかかってしまった可能性がある。等

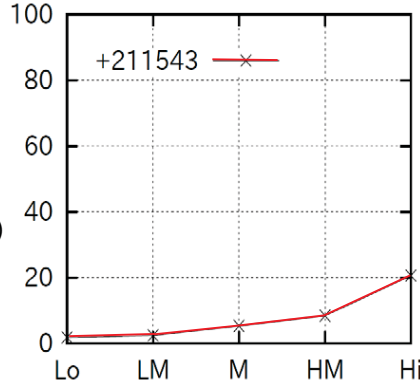
参考：各解答番号ごとの五分位図



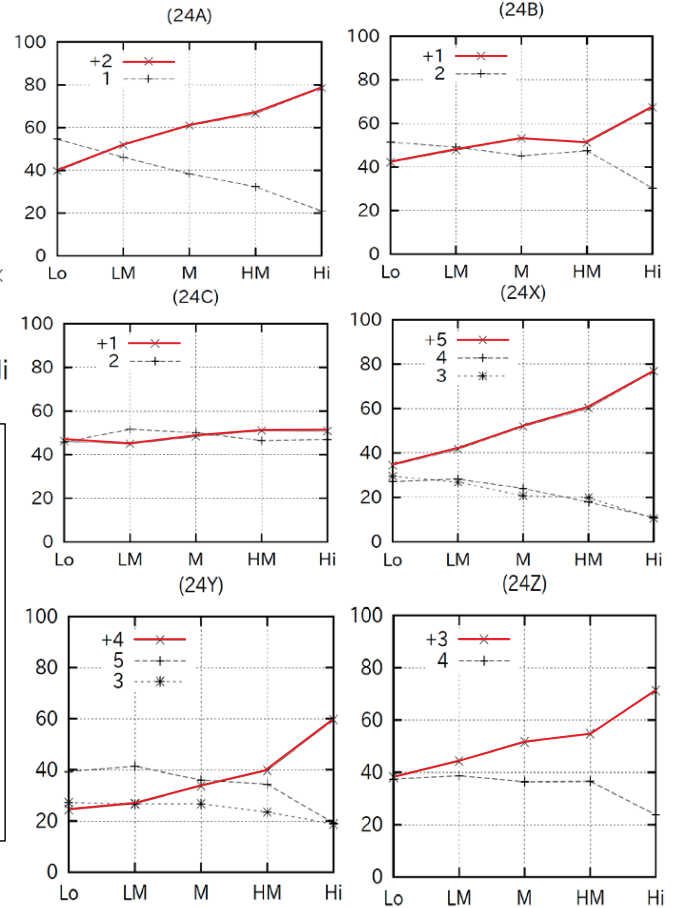
24

【バージョンB】  
第5問問24  
(解答番号24)  
※1回読み  
多肢選択  
選択肢数  
空欄A~C各2  
(複数回使用可)  
空欄X~Z 3

正答率 7.8%



参考：各解答番号ごとの五分位図



Lo群とHi群の正答率の差が20ポイント以下の理由として、以下が考えられる。(両バージョンの共通問題であるが、バージョンAではその差は20ポイント以下ではなかった。)

- ・講義を聞き、ワークシートにメモを取ることを通じて要点を捉える問題であるが、六つの空欄全てが正解でないと正答とならないため、正答率が7.8%と低くなった可能性がある。
- ・特に空欄C (24C) は、「天然繊維」の染色や漂白に使用される化学物質の説明を正しく聞き取って把握するのが難しかった可能性がある。

等

〈新しい出題形式等〉

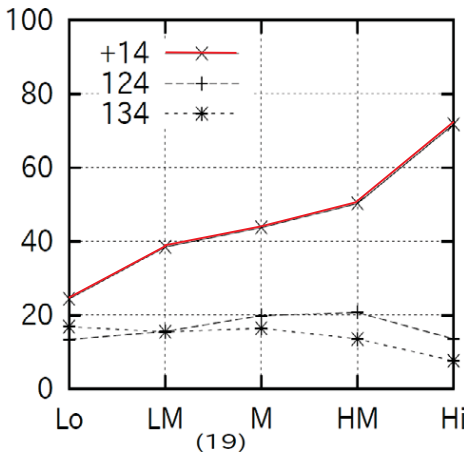
①当てはまる選択肢を全て選択する問題

【バージョンA】

19

第6問B問19  
(解答番号19)  
※2回読み  
多肢選択  
選択肢数4  
全て選ぶ  
完答  
(正答二つ)

正答率 45.5%

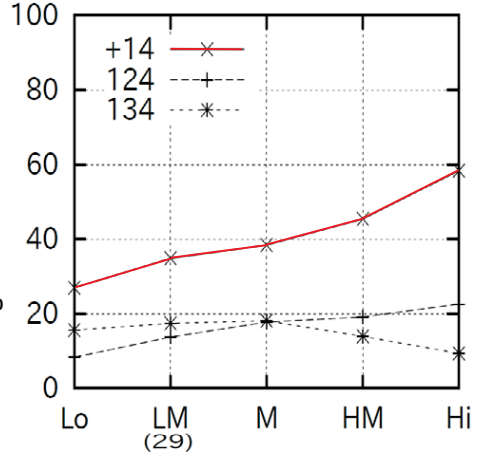


【バージョンB】

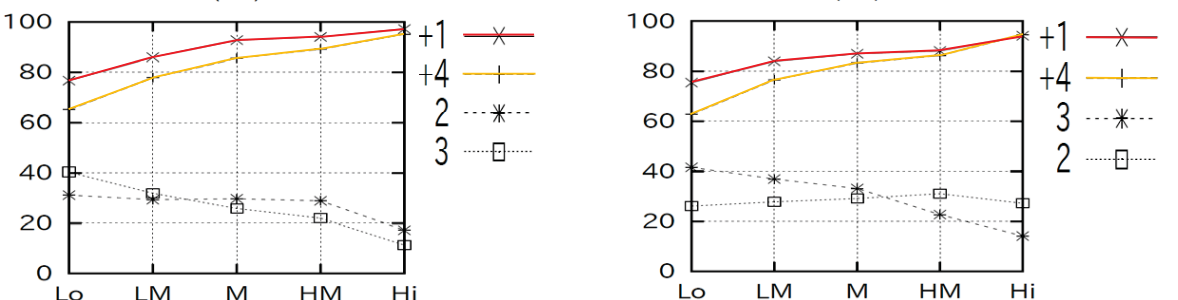
29

第6問B問29  
(解答番号29)  
※1回読み  
多肢選択  
選択肢数4  
全て選ぶ  
完答  
(正答二つ)

正答率 40.8%



参考：各選択肢ごとの五分位図



バージョンAとバージョンBの共通問題で、読み上げ回数だけが違う問題である。バージョンA、BともLo群とHi群の正答率の差が30ポイント以上あった。バージョンAでは、特にHi群の識別に寄与した可能性がある。一方バージョンBでは、Hi群でも正答率が60%に届かなかった。

- アンケート調査の自由記述については、次のとおりである。

《教員アンケート 例》

- ・ 思考したり判断力が問われる問題が非常に多いように感じました。あと処理能力が遅い生徒には厳しいと感じました。
- ・ 聞くだけでなく考えさせるような問題が多くよい。
- ・ 日本人の学生らしい、臨場感のある話しぶりの音声もあってよかったです。
- ・ 指示が日本語で書かれているので、受験生がリスニングの英語に集中できるという点で、リスニング力を測定するテストとしては望ましいことだと感じた。ただ、選択肢の英語が長いものが数問あり、リスニング以外の要素（速読力）が問われてしまうので、「リスニング」として実施する試験であれば、選択肢はあまり長くしないほうがよい。
- ・ 設問のタイプが多様であるため、問題の設定を理解するのに戸惑う生徒が得点が低くなる可能性があります。適切なポーズが必要だと思います。
- ・ 生徒に考えさせる、良い問題は多いが、問題が何を聞き、どのように答えさせるのか、また条件や状況は何なのか、生徒は理解しなければいけない。そのための時間（ポーズ）はもっと長くてなくてはならない。
- ・ 状況や表、グラフ等を確認する時間が少ない。特に1回しか流れない場合は状況把握の時間が十分に確保される必要がある。
- ・ 録音されている音が小さく（特に質問文を読み上げる日本語の部分）、CDラジカセでの対応に苦慮した。
- ・ マークするまでの間がやや短く感じた（バージョンB）。
- ・ 問題番号の読み上げから、問題文が流れるまでの間隔が短すぎた。
- ・ リスニングは特に集中力を要するので、問題の指示は、シンプルな方がよい。

《生徒アンケート 例》

【バージョンA】

- ・ しっかりと状況や文の内容全体を理解することを必要とする問がたくさんあって、良かったと思う。
- ・ 今までにやったことのない問題の形式があって少しとまどう面があった。
- ・ これくらい問題のバリエーションに富んでいればしっかり英語力をはかれると思う。
- ・ 問題番号を言ってから、リスニング用の音声を流すまでの間をもう少しとってほしい。
- ・ 問題を解く時間とマークをする時間が少なかったので、設けてほしい。また全体的に間を空けてほしい。
- ・ 表や図を使った問題が多いにもかかわらず、その図や表を見る時間が少なかったように感じた。せめて聞き終わったあとに解答する時間（表などと参照する）がもう少し欲しかったです。
- ・ 英検などにくらべては格段に問が少なかったと思う。
- ・ 6つの選択肢が全て合っているというシステムは、あまりに酷だと思う。
- ・ もう少し考えて、マークを丁寧にぬることができる時間がほしいと思った。
- ・ アメリカ人以外の英語のリスニングをするのは新鮮だった。

【バージョンB】

- ・ 実際に使いそうな状況の問題があって良かった。
- ・ あまり受けたことのない新しいタイプの問題が多く、面白かったが、あまりにもテンポが早く焦ってしまった。
- ・ 問題番号が読まれてから、問題文が始まる間がとても短い。
- ・ 問題を流す間隔が早くて塗りつぶす時間がなかったです。
- ・ 問題の説明をしてから、英文が流れ始めるまでの時間が短い。
- ・ 難しく、とても進むスピードが速かった
- ・ 全体的に難しかったです。聞いた後に考える時間が少しほしいと思いました。
- ・ 音量が小さかった。聞こえなくはないが、まわりのペンの音に負けてる。
- ・ イギリス英語や英語があまり得意ではない人の音声が今までにないものでおもしろかった。
- ・ イギリスだかアメリカだかの違いは分からなかった。



## 《有識者のコメントの概要》

### ○出題のねらいに照らした作問について

#### ①評価すべき点

- ・「日常生活」の設定も、受検者層にとって、概ね自然な状況設定になっている点も高く評価する。第6問以外は、アカデミックな環境でのノート・テイキングなども含まれていて、高等学校での学習との親和性が高いと感じた。
- ・聞き取った文の語彙や構造が理解できているか試す問題から、要点を汲み取る問題、さらに後半では聞き取った情報と図表からの情報を統合させて解答する問題、必要な情報を把握し、統合して解答する問題など、バランスの良い出題になっていると思います。単純な英文の理解から、思考力や判断力を試す問題まで含めている点が評価できます。
- ・今回二つのバージョンが作成されましたが、バージョンBのほうがより高い妥当性、信頼性、弁別力を持ったテストであると思いました。
- ・問題文を1回聞かせるか、2回聞かせるかについては様々な議論があり、それぞれに利点と弱点があります。私は実際のコミュニケーション場面を反映した、1回だけ聞かせるやり方を導入したBを評価します。問題数を増やしているのも信頼性向上につながると考えます。
- ・身近な話題や馴染みのある社会的な話題についてのやり取りや、学校、レストラン等、場面を想定したコミュニケーションの例を取り上げていて、測ろうとする資質・能力などから考えて作問のねらいも明確で、言語の使用場面の例、言語の働きなどにおいて、扱われている題材・内容ともに適切である。
- ・最初に明細書（specification）の大枠を作成し、それに基づいて作問がなされている点が、各段階で求められる力を漏れなく測定するために有効に機能していると思います。

#### ②改善すべき点

- ・Readingに比べて、全体の正答率が低く、下位レベルの学習者内での識別がどこまでできているのが疑問に感じた。最初の数問は、導入的な意味でもう少し難易度を下げた項目にしておいてもいいであろう。
- ・第6問のAについては、状況を把握しにくく感じた。
- ・聞き取った情報と図表を組み合わせるという形式は良問だと思いますが、一度に処理させる項目が多くなりすぎないように気を付けるべきでしょう。
- ・聞き取った情報を統合して解答させる問題も、処理させる項目が多くなりすぎないように気を付ける必要があるでしょう。
- ・高校の授業でも、英語を用いて授業を行い、教師とのやり取りをすることが自然になっているし、望ましい授業の方法を示すべきところでもあるので、そこも含めて聞き取らせるよう、日本語部分は英語にすべきではないかと考える。
- ・「物語文」を読むこと同様に、「物語文」を聞くことは日常の聞き取りでよく行われる活動だと思いますので、（明細書（specification）に）「物語文」のカテゴリーを設けてはどうでしょうか。
- ・課題（task）が複雑過ぎる問題があるように思います。

#### ③その他

- ・筆記の解答番号31と32の場合のように、「両方をそれぞれ過不足なくマークしている場合のみ正解とする。」のは受験生に厳しすぎると感じました。



## ○題材の選定や問題の場面設定、出題形式等について

### ①評価すべき点

- ・項目数が多いのでセットBがより望ましく、結果の信頼性も確保しやすいであろう。なお、解答方法がシンプルであれば、指示文も英語で示すことも可能であろう。
- ・聞いた英文の構造などを問う大問1は別として、テキストが話される場面がしっかりと提示されていることは高く評価できます。現実のコミュニケーションにおける聞く力をより反映していると思います。
- ・「実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視」という方針は、新しい高等学校の学習指導要領でも一層重視されたことであり、評価できます。各問いの英文指示文で場面、目的、状況が説明されており、受験生が読み手として置かれた自分の立場をよく理解して解答に取り組むことができます。
- ・音声を正しく聞き取る能力を測定するために短文を聞かせて非言語で解答させる第2問のような課題はねらいにも合致しており良く練られた課題です。基礎的な聞き取り能力を検証するための第1問も英語で解答を求める課題ですが妥当であるかと思えます。

### ②改善すべき点

- ・今回の試行調査は、いろいろな形式を試すにはいい機会だったと思うし、ミニ・レクチャーを聴いて解答する問題などは非常に好ましい。ただし、第5問は、リスニングのパートが分割されている点で、受験者にとって複雑で混乱が生じるように思う。
- ・後半の情報を整理したり統合したりして解答させる問題では、一度に処理させる情報が過多にならないよう気を付ける必要があります。リスニングというよりも認知能力の負荷を試すテストにならないように注意していただきたいと思えます。
- ・課題および指示文が複雑であるように思われます。全体を通して単純化をしていただくよう願います。

### ③アメリカ英語以外の読み上げについて

- ・ELF (English as a Lingua Franca : 共通の母語を持たない人同士のコミュニケーションに使われる英語) の観点からも、アメリカ英語以外が含まれている点は大歓迎だが、特にその影響によって正答率が左右されているようには思えないので、もっと多くの項目に反映させてもいいであろう。
- ・この点も私は評価しています。実際に英語ネイティブよりも第2言語として英語を使用する人口の方が圧倒的に多く、世界では第2言語として英語を使って非英語ネイティブの方とコミュニケーションをとる機会のほうが多いからです。今回はイギリス人と日本人が読み上げに加わっていましたが、もっとアジアの人々などの非ネイティブを起用してもいいのではないかと思います（もちろんアクセント等があまりきつくない方に限っての話です）。
- ・少数ではあるが、アメリカ英語以外の音声でも録音されたことについて評価。日本人教員の英語による授業や生徒同士の英語でのやり取りが授業の中心となっている現在、有益なことだと思う。
- ・国際化が進行し、日本人学習者も小学校から様々な国籍のALT (外国語指導助手) 等の英語に触れる時代になりましたので、アメリカ英語以外の読み上げによる出題に賛成です。ただし、本プレテストのQuestion No. 12 の1 (Akiko) には、英語の苦手な日本人女性学習者というステレオタイプ的な設定が感じられました。日本人の読み上げがある場合、頑張っているL2 user (第二言語使用者) として、前向きな姿で登場させたいと思えます。
- ・聞き取りに特別な訓練が必要な種類の英語ではありませんので、問題ないかと思われます。

## ○問いのバランスを図る上で、留意すべき点

- ・「筆記」に比べると難易度が高く、最初のほうに、もう少しLead-in（導入）的な問題を出題してもいいと思う。
- ・音声に対する受検者の集中力からいくと、現行の受験時間が適切であろう。それと同時に信頼できる結果の確保から、項目数も30問程度が必要であろう。
- ・問題構成、設問数はバージョンBがいいのではないかというのが私の感想です。内容に対しても異論ありません。後半の設問で、一度に処理すべき情報が過多にならないように留意していただければいいかと思えます。
- ・大学入学共通テストのねらいが、「高校教育を通じて、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問う」ことにあり、「実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、目的、状況の設定を重視」という方針を持つとき、（中略）大学入試で口頭の媒介技能（日本の場合は英語を聞いて日本語で説明する技能など）を測ることは、大学入学後にEMI（English Medium Instruction）（英語を媒介とした指導）が行われるか否かにかかわらず、日本のEFL環境（英語を外国語として使用する環境）で求められることと思います。こうした技能は国公立大学の個別試験では測られますが、個別試験を実施しない私立大学等が存在することを考えると、大学入学共通テストでマークシート方式で、英語を聞いて適切な日本語の説明を選ぶ問いなどを出題して媒介技能を測定して、リスニングの問いのバランスを図ってはいかがでしょうか。
- ・全体として質の良い問が多いという印象です。「ねらい」にも合致しています。
- ・正答率の観察、および自ら受験者としてテストを受けてみて、難易度のかなりの部分が課題の設定のしかたおよび時間配分にあるように思われます。メモを取ってもよいのか、取らないのか、問の英文が書かれているのかいないのか、各問によって異なるので受検者は迷うことも多々あるのではないのでしょうか。例えば、（中略）指示文および課題をよりシンプルにすることはできないのでしょうか。

## IV 受検上の配慮(点字問題)の結果報告

### 1 調査の概要

#### ①概要

平成29年7月13日に公表された「大学入学共通テスト実施方針」では、新しいテストの問題作成や採点方法等について、平成29年度及び平成30年度に試行調査（プレテスト）を通じた検証を行うこととされている。これを受けて大学入試センターでは、「大学入学共通テスト」の実施に向けた受検上の配慮の在り方に関して順次検討を行うこととしている。

平成29年度においては、点字教育を受けた方を対象に、記述式問題における解答方法等に関する配慮の在り方について、試行調査（プレテスト）を通じた検証を行う。

#### ②実施科目

「国語」（60分）、「数学Ⅰ」（45分）

※ 平成29年5月公表の「記述式問題のモデル問題例」を使用。

#### ③実施期間

平成30年2月5日（月）～3月3日（土）

上記の期間内に、試行調査（プレテスト）に参加する特別支援学校（視覚障害）（以下「協力校」という。）が任意の日時で実施。

#### ④受検対象

「国語総合」及び「数学Ⅰ」履修者

#### ⑤試験会場

試行調査（プレテスト）に参加する各協力校

#### ⑥監督等

試行調査（プレテスト）に参加する各協力校の教職員

#### ⑦協力校数及び受検者数

全国15校 41名（高等部1年生、2年生、3年生の在学生在が受検）

※ 参考（直近の大学入試センター試験 点字解答 志願者数及び受験者数）

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
志願者数	9名	15名	16名	12名	12名
受験者数	7名	6名	8名	3名	6名

## 2 分析結果の報告

- 大学入学共通テストにおける受検上の配慮については、大学入試センター試験で行ってきた受検上の配慮事項を受け継ぎつつ、特に記述式問題の導入に当たりどのような対応が必要となるかについて、合理的配慮の基本的な考え方※を踏まえつつ、受検者の負担と実施面の制約とを考慮して検討している。
- 今回の試行調査を通じて、点字受検者については、読み取った情報のメモや思考過程の下書き、文字の訂正、解答の確認等に相当の時間を要すること、文字数のカウントを指で触って行うために指定された文字数内で記述することに相当の時間を要することなどの課題が改めて確認された。この点は、数式や短文で解答する数学よりも、国語において特に顕著な課題となる。
- 一方で、2日間の試験実施日程の中で実施可能な試験時間としては、受検者の負担や実施面の制約を考慮すれば、一般試験時間の1.5倍が上限であると考えられる。記述式問題を通じて問いたい資質・能力は一般受検者と同様に問うことを前提としつつ、こうした状況の中で必要となる合理的配慮として、問題文の読み取りに当たっての配慮や、特に国語については解答時間と解答する文字数等や問題数のバランスについて引き続き検討を行い、本年度中（年明け頃を予定）に再度試行調査を実施することとする。
- なお、点字解答以外の事項（記述式問題の解答用紙の設計に関する検証や、文字を書くことが困難な場合への対応等）についても、本年度中に順次試行調査を行う予定である。

※ 合理的配慮の基本的な考え方

- ・ 行政機関等及び事業者が、その事務・事業を行うに当たり、個々の場面において、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合に、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、社会的障壁を除去するための必要かつ合理的な取組であり、その実施に伴う負担が過重でないもの。
- ・ 行政機関等及び事業者の事務・事業の目的・内容・機能に照らし、必要とされる範囲で本来の業務に付随するものに限られること、障害者でない者との比較において同等の機会の提供を受けるためのものであること、事務・事業の目的・内容・機能の本質的な変更には及ばないことに留意。